

茨城県教育財団文化財調査報告第47集

主要地方道茨城・鹿島線道路改良
工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書

梨ノ子木久保遺跡
割り塚古墳



昭和 63 年 6 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第47集

主要地方道茨城・鹿島線道路改良
工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書

梨ノ子木久保遺跡
わり塚古墳

昭和63年6月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県土の普遍的な発展と交通量の増加に積極的に対応するため、道路網の整備を進めております。

主要地方道茨城・鹿島線道路改良工事も、その一環として計画されたもので、産業の発展と地域の活性化に寄与するものであります。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と茨城・鹿島線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査についての委託契約を結び、昭和62年4月から同年6月まで梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳の発掘調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構・遺物が検出され、鉾田町の歴史を解明する上に多大の成果をあげることができました。

本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である茨城県（道路建設課）・鉾田土木事務所をはじめ、茨城県教育委員会・鉾田町教育委員会等関係機関及び関係各位から寄せられた御指導・御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

昭和63年6月30日

財団法人 茨城県教育財団

理事長 礒田 勇

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和62年度に発掘調査を実施した茨城県鹿島郡銚田町に所在する梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳の調査報告書である。
- 2 梨ノ子木久保他1遺跡の発掘・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

| | | | |
|-----------------|------------------|-----------------------------|-----------------|
| 理 事 長 | 川 又 友三郎 磯 田 勇 | 昭和61年4月～昭和63年5月 昭和63年6月～ | |
| 副 理 事 長 | 磯 田 勇 小 林 元 | 昭和61年4月～昭和63年3月 昭和63年4月～ | |
| 常 務 理 事 | 滑 川 貞 雄 | 昭和61年4月～ | |
| 事 務 局 長 | 坂 場 庸 克 | 昭和62年4月～ | |
| 調 査 課 長 | 青 木 義 夫 | 昭和59年4月～ | |
| 企 画 管 理 班 | 班 長 | 水 飼 敏 夫 | 昭和62年4月～ |
| | 主任調査員 | 山 本 静 男 | 昭和61年4月 |
| | 係 長 | 園 部 昌 俊 | 昭和63年4月～ |
| | 主 任 | 山 崎 初 雄 | 昭和60年4月～ |
| | 主 事 | 富 永 明 | 昭和62年4月～昭和63年3月 |
| | 〃 | 大 部 章 | 昭和61年4月～ |
| 調 査 第 三 班 | 班 長 | 石 井 毅 | 昭和62年度 |
| | 主任調査員 | 鈴 木 美 治 | 昭和62年度調査 |
| | 調 査 員 | 小松崎 猛彦 | 昭和62年度調査 |
| 整 理 班 | 班 長 | 沼 田 文 夫 | 昭和63年度 |
| | 調 査 員 | 後 藤 義 明 | 昭和63年度整理・執筆 |

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、後藤義明が執筆・編集を担当した。
- 4 本書の作成にあたり、梨ノ子木久保遺跡出土土器について、日本考古学研究所の新井和之氏に御指導をいただいた。
- 5 本書で使用した記号等については、第3章第1節の記載方法の項を参照されたい。

目次

| | |
|----------------|----|
| 序 | |
| 例言 | |
| 第1章 調査経緯 | 1 |
| 第1節 調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 調査方法 | 1 |
| 1 調査区設定 | 1 |
| 2 基本層序の検討 | 2 |
| 3 遺構確認 | 3 |
| 4 遺構調査 | 3 |
| 5 調査経過 | 4 |
| 第2章 位置と環境 | 6 |
| 第1節 地理的環境 | 6 |
| 第2節 歴史的環境 | 8 |
| 第3章 遺構・遺物の記載方法 | 12 |
| 第1節 遺構の記載方法 | 12 |
| 第2節 遺物の記載方法 | 13 |
| 第4章 梨ノ子木久保遺跡 | 14 |
| 第1節 遺跡の概要 | 15 |
| 第2節 土坑と出土遺物 | 15 |
| 第3節 遺構外出土遺物 | 23 |
| 第4節 まとめ | 37 |
| 第5章 割り塚古墳 | 42 |
| 第1節 遺跡の概要 | 42 |
| 第2節 塚 | 42 |
| 第3節 まとめ | 46 |
| 終章 むすび | 48 |

挿 図 目 次

| | |
|--|--|
| 第1図 調査区名称図 …………… 2 | 第14図 第6号土坑実測図 ……………21 |
| 第2図 梨ノ子木久保遺跡土層柱状図 …… 2 | 第15図 第6号土坑出土遺物拓影図 ……22 |
| 第3図 割り塚古墳土層柱状図 …………… 3 | 第16図 遺構外出土遺物拓影図(1) ……29 |
| 第4図 梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳 周辺図 …………… 7 | 第17図 遺構外出土遺物拓影図(2) ……30 |
| 第5図 梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳 周辺の遺跡位置図 ……………10 | 第18図 遺構外出土遺物拓影図(3) ……31 |
| 第6図 梨ノ子木久保遺跡遺構配置図 ……14 | 第19図 遺構外出土遺物拓影図(4) ……32 |
| 第7図 第1号土坑実測図 ……………16 | 第20図 遺構外出土遺物拓影図(5) ……33 |
| 第8図 第1号土坑出土遺物実測図(尖 頭器・石匙) ……………17 | 第21図 遺構外出土遺物実測図 ……33 |
| 第9図 第2号土坑実測図 ……………18 | 第22図 遺構外出土遺物実測図(敲石) …34 |
| 第10図 第3号土坑実測図 ……………18 | 第23図 遺構外出土遺物実測図(石鏃・ スクレイパー) ……………35 |
| 第11図 第3号土坑出土遺物実測図 ……19 | 第24図 遺構外出土遺物実測図(石槍) …36 |
| 第12図 第4号土坑実測図 ……………19 | 第25図 割り塚古墳遺構配置図 ……43 |
| 第13図 第5号土坑実測図 ……………20 | 第26図 割り塚古墳平面図 ……………44 |
| | 第27図 割り塚古墳土層断面実測図 ……45 |

表 目 次

| | |
|--------------------------------------|---|
| 表1 梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳 周辺遺跡一覧表 ……………11 | 表3 縄文時代石器観察表 ……………34 |
| 表2 土坑一覧表 ……………23 | 表4 近県における尖頭器出土例—先土 器時代終末期から縄文時代草創期 …39 |

写 真 図 版

| | |
|---|------------------------------|
| P L 1 梨ノ子木久保遺跡調査前全景・トレン チ発掘全景・遺跡全景・第1号土坑遺物 出土状況・第2～5号土坑 | 出土土器 |
| P L 2 第6号土坑・割り塚古墳調査前全景・ トレンチ発掘全景・土層断面・第6号土坑 | P L 3 II群a類・III群c類土器 |
| | P L 4 III群c類・III群d類・III群e類土器 |
| | P L 5 石器(1)—尖頭器 |
| | P L 6 石器(2)—石匙・敲石・石鏃・石槍 |

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

主要地方道茨城・鹿島線は、茨城町を起点に鉾田町を経由して鹿島町に至る県央と鹿島臨海工業地域を結ぶ重要な道路である。本道路は、幅員が狭く急カーブが多いため、近年の交通量の増加に対応が難しくなっている。特に鉾田町内においては、道路沿いに人家が密集し、幅員を拡張することは極めて困難なため、茨城県は、鉾田町菅野谷新田地区を起点に市街地までの区間を、現在の路線に並行する形でバイパスを建設する道路の整備を計画した。

工事に先立ち、昭和61年8月27日、茨城県鉾田土木事務所は、鉾田町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。鉾田町教育委員会は分布調査を実施し工事予定地内に2遺跡の存在を確認し、その取扱いについては茨城県教育委員会と協議されたい旨回答した。茨城県教育委員会、茨城県土木部道路建設課、茨城県鉾田土木事務所、鉾田町教育委員会の4者で現地踏査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認した。そこで、茨城県教育委員会と茨城県は文化財保護の立場から、埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、現状保存が困難なため記録保存の処置を講ずることとなった。調査機関としては、茨城県教育財団が紹介された。それを受けて、茨城県教育庁文化課と茨城県教育財団は、昭和62年1月に現地踏査を行い、同年4月1日から6月までの期間で発掘調査を実施することで一致した。

茨城県教育財団は、茨城県（土木部道路建設課）と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、昭和62年4月1日から梨ノ子木久保遺跡（3,011m²）、割り塚古墳（169.26m²）の調査を実施した。

第2節 調査方法

1 調査区設定

梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

梨ノ子木久保遺跡の調査区設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸(南北)+22,840m、Y軸(東西)+55,760mの交点を基準点とし、その基準点を中心にして40m方眼を設定し大調査区とした。さらに、大調査区を4m四方の小調査区に分割した。すなわち、40mの大調査区内に4m四方の小調査区を100個設定したわけである。大調査区は、基準点から北方へ40m、西方へ40mの点を起点

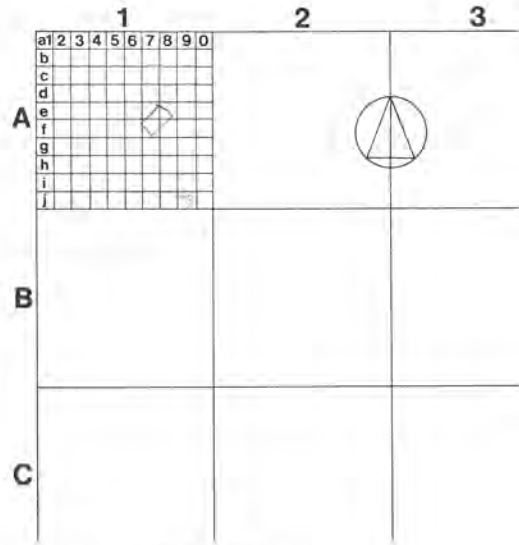
として、南へ「A」～「D」とし、東へ「1」～「3」とし、A1区・B2区等と表記した。小調査では、南へ「a」・「b」～「i」・「j」とし、東へ「1」～「9」・「0」と表記した。各調査区の名称は、大調査区と小調査区を合わせた四文字で「A1a1」・「B2b2」のように表記し、小調査区をグリッドと呼称した。

割り塚古墳の調査区設定は、日本平面直角座標第IX系、X軸(南北)+21,372m、Y軸(東西)+56,784mの交点を基準点とし、その基準点から北方へ40m、西方へ40mの点を起点として、梨ノ子木久保遺跡と同じように大調査区及び小調査区を設定した。

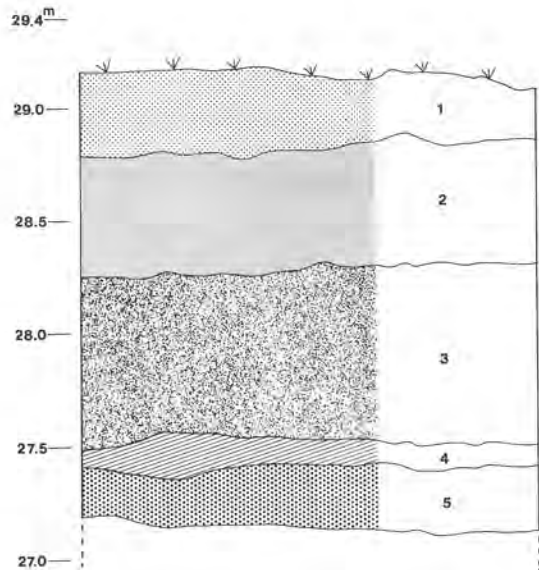
なお、基準点の測量杭打ちは、社団法人「茨城県建設コンサルタント」に委託した。

2 基本層序の検討

梨ノ子木久保遺跡の基本層序は、第2図のとおりである。第1層は表土層で、20～35cmほどの厚さを有し、ローム粒子・炭化粒子を含む締まりの弱い暗褐色土である。第2層はいわゆるソフトローム層で、40cm～50cmの厚さを有する明褐色土である。第3層は極めて締まりのあるハードローム層で、60～80cmの厚さを有し、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含む褐色土層である。第4層は5～15cmの厚さを有し、径が1～2mmの黄橙色や浅黄橙色の砂粒を含む褐色土である。第5層は極めて締まりのあるハードローム層で、褐色を呈している。



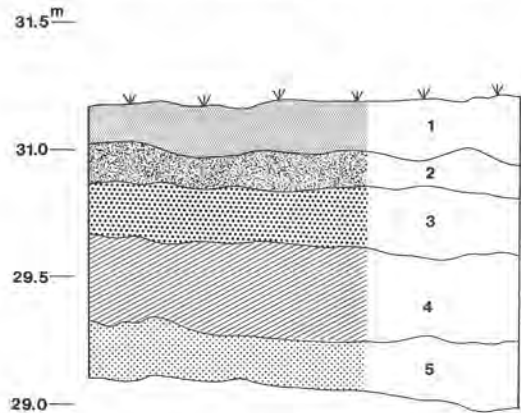
第1図 調査区名称図



第2図 梨ノ子木久保遺跡土層柱状図

遺跡の中央部を通過する農道を境に、北西側は、耕作のため表土から1 mほどの深さまで土が削平されており、ソフトローム層は完全に消失している。20~30cmほどの厚さを有する耕作土の下は、ハードローム層である。南東側は表土が一部削平されている箇所もみられ、耕作土下にはソフトローム層が残存しているが、^{こぼろ}牛蒡等の作付けによるトレンチャー痕が深く入っている。

割り塚古墳の基本層序は、第3図のとおりである。第1層は表土層で、20~30cmの厚さを有し、ロームブロックを含む締まりのある暗褐色土である。第2層は、10~20cmの厚さを有し、ロームブロックを含む粘性のある黒褐色土である。第3層は、20~30cmの厚さを有し、硬く締まった褐色土である。第4層は、40cm前後の厚さを有し、粘性のある明褐色土である。第5層は、粘性及び締まりのあるにぶい橙色土である。



第3図 割り塚古墳土層柱状図

3 遺構確認

梨ノ子木久保遺跡の調査面積は3,011m²であり、遺跡内の雑草や雑木等の上物を除去した後、道路のセンター杭を中心に幅2 mのトレンチを北側、中央及び南側に設定し、遺構の検出を試みた。その結果、遺跡の中央部を貫通する農道を境に、北西側はすでに表土から1 m前後の深さまで重機による削平を受けており、厚さ20cm前後の耕作土下はハードローム層となっていて遺構は確認できなかった。南東側は、^{こぼろ}牛蒡耕作によるトレンチャー痕が格子状に入っているが、遺構とみられる落ち込みを確認した。この結果をふまえ、担当者間で検討し、農道を境とした南東側の調査区域を重機により表土を除去することにした。その後、遺構の確認調査を進め、6基の土坑を確認した。

割り塚古墳の調査面積は169.26m²であり、遺跡内の雑木等を除去した後、墳頂部から裾部にかけて北西から南東の方向に幅1 mのトレンチとこれに直交するトレンチをT字形に設定し、土層観察及び古墳に伴う周溝等の有無を確認した。

4 遺構調査

梨ノ子木久保遺跡における遺構調査は、次のように実施した。土坑の調査は、長軸方向で二分

して掘り込む「二分割法」で実施し、地区の名称は時計回りに1・2区とした。土層観察は、色相・含有物・混入物の種類と量、及び粘性・吸水性・締まり具合等を観察し、分類の基準とした。色相の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用して行った。

遺構や遺物の平面実測は水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点を基準として、レベルを用いて水糸を水平にセットした実測基準を設定して行った。遺物は原位置を保ち、各区名・遺物番号・出土位置・レベル等を遺物台帳、図面に記録し収納した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成→遺構平面図作成→遺構断面図作成の順で行うことを基本とした。

5 調査経過

梨ノ子木久保・割り塚の2遺跡は、昭和62年4月に調査を開始し、同年6月30日をもって全調査を終了した。2遺跡の調査対象面積は3,180.26㎡で、3ヶ月間の調査期間であり、並行して2遺跡の調査を進めた。以下、発掘調査の経過について、その概要を記述する。

4月上旬 4月9日より現場作業を開始し、調査区域、土捨て場及び表土除去等の件について鉦田事務所と打合わせをすると共に、割り塚古墳に現場事務所を設置するために、その場所の伐開作業を実施した。

4月中旬 現場事務所・プレハブ倉庫の設置や発掘器材の搬入など、発掘準備の作業を進めた。また、割り塚古墳の調査区域の伐開作業を実施した。

4月下旬 発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って、22日に鉄入れ式を挙行了。また、発掘調査前の遺跡全景写真撮影を行うと共に、梨ノ子木久保遺跡のトレンチによる遺構確認と、遺構の調査を先行することとし、同遺跡の基本層序の確認のためテストピットの掘り下げ、土層断面図の作成をした。

5月上旬 トレンチ発掘による遺構確認調査の結果、農道を境とした遺跡の北西側には遺構が確認されず、南東側に遺構と思われる落ち込みを数か所確認した。遺構を確認した農道より南東側の調査地域の表土を全面除去して調査を進めることにし、5月7日より重機による表土除去を進めながら、南東側の北西部から遺構確認調査に入った。

5月中旬 12日に表土除去が終了したため、遺構確認調査を継続すると共に、遺構調査を開始した。遺跡内の中央部を通過する農道より北西側のB2区には4基の土坑が確認され、末日までに4基の調査を終了した。

5月下旬 さらに遺構確認の調査を進めた結果、農道より南東側のC2区に2基の土坑と竪穴式住

居跡状の落ち込みが確認された。調査の結果、この2軒は住居跡でないことが判明し、最終的には土坑6基となった。

6月上旬 引続き、土坑の調査と農道部下の遺構確認調査を進め梨ノ子木久保遺跡の調査が終了近くなったため、割り塚古墳の調査に主力を移し、同遺跡の調査区域の上物除去及び本跡の基本層序の確認のため、テストピットの掘り下げと土層断面図の作成をした。

6月中旬 割り塚古墳は、発掘調査以前は古墳として位置づけられていた。墳丘部の約2分の1が調査区域外であるため、墳丘を2分する形で北西から南東方向に幅1mのトレンチとこれに直交するトレンチをT字形に墳頂部から北東方向に設定して掘り込み土層断面図の作成及び周溝等の確認調査を実施した。その結果、本跡からは周溝及び遺物は検出されなかった。梨ノ子木久保遺跡は、12日に第5・6土坑の完掘写真を撮影し、発掘調査をすべて終了した。

6月下旬 22日からは調査終了に伴い、次の発掘調査遺跡への移転に伴う出土遺物や発掘用器材等の搬出準備を開始した。23日には、日本考古学研究所の新井和之氏を招き、梨ノ子木久保遺跡出土土器の編年と縄文時代早・前期の土器の見方等について班内研修会を開いた。24日からは残務処理を行うかたわら、調査資料のとりまとめを行った。30日には、梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳における一切の作業は終了した。

第2章 位置と環境

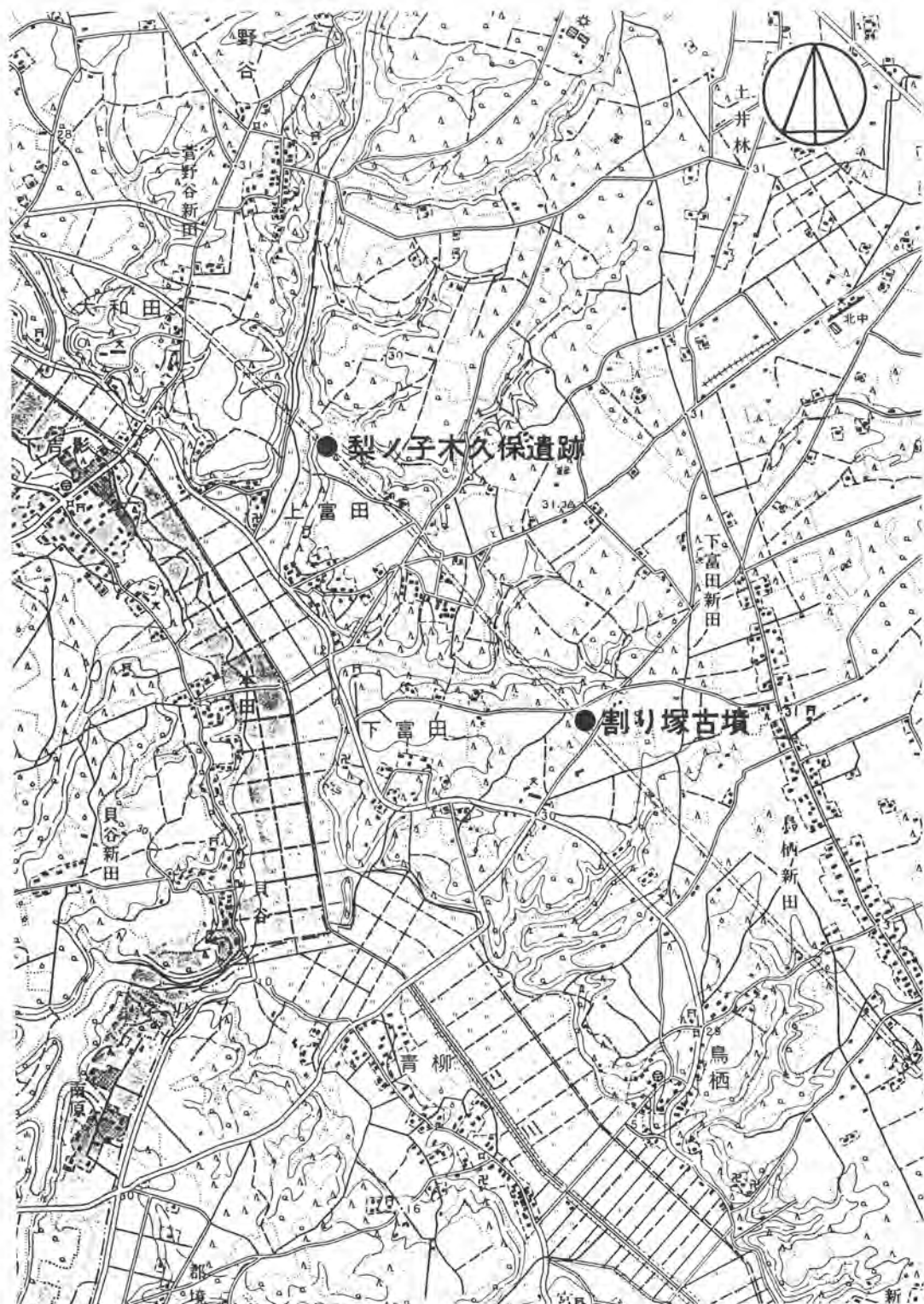
第1節 地理的環境

梨ノ子木久保遺跡は、鹿島郡鉾田町大字菅谷字梨ノ子木久保1404-イほかに所在し、割り塚古墳は、梨ノ子木久保遺跡から南東へ約1.6km離れた同町大字下富田字廣山803-1に所在する。

鉾田町は茨城県の南東部、鹿島灘に面して位置し、北は東茨城郡茨城町・鹿島郡旭村に接し、東は鹿島灘、南は鹿島郡大洋村・行方郡北浦村・日本第7位の水域面積を有する北浦に、西は行方郡玉造町・東茨城郡小川町に接している。同町は、昭和30年に鉾田町、徳宿村、新宮村、秋津村の1町3村が合併して鉾田町となり、同年、旭村の一部を編入合併し現在の鉾田町となった。町の面積は約107km²で、東西約16km、南北13kmとやや東西に長く、南東に向かって末広がり町域であり、人口は昭和63年4月現在28,934人である。町の東部は鹿島台地、西部は行方台地がそれぞれ鹿島町、潮来町方面に延びている。鹿島台地の西側には、鉾田川が南流し、行方台地の東側に巴川が南東流して鉾田町で合流し、北浦の湖頭に鉾田低地を形成している。両河川の谷津がそれぞれの台地に樹枝状に入り組み複雑な地形を形成している。台地は平地林の点在する畑作地帯となっており、野菜類を中心作物とした農業は、鉾田町の産業の中核をなし、京浜市場を中心に全国に出荷されている。首都東京から約80km圏内に位置し、近年では都市近郊型の施設園芸農業の発達が目ざましい。鹿島灘沿岸は江戸時代から地引き網漁が盛んであったが現在は衰え、大竹海岸などの海水浴場や釣り場として観光地へと変貌しつつある。鉾田町は、東部の太平洋岸を国道51号線が縦断し、市街地中心部を主要地方道茨城・鹿島線、小川・鉾田線が通っているほか、鹿島鉄道鉾田線が鉾田・石岡間を結び、昭和60年にはJR大洗鹿島線が県都水戸・鹿島神宮間に開通し、鹿行地域北部の交通の要衝となっている。市街地は北浦北岸の湖頭に位置し、江戸時代から明治時代にかけては水上交通の要所で、物資の取積地として河岸が栄えると共に、陸上交通の要でもあった。明治時代に入り、陸上交通の発達により鹿行地域北部の政治・経済の中心地となり、現在では、茨城県鹿行地方事務所・簡易裁判所等の公共機関が集中し、行政都市としての機能を有するに至っている。

梨ノ子木久保遺跡は、中心市街地から北西に約7.6kmの地点にあり、巴川の支流に形成された沖積低地に舌状に張り出した台地の縁辺部に位置する。当遺跡の位置する台地は、北側に小支谷が入り、西側は谷津を形成している。標高は29mほどで、沖積低地との比高差は17mほどである。調査面積は3,011m²で、現況は山林・畑である。

割り塚古墳は、梨ノ子木久保遺跡から南東に1.6kmほど離れた標高31mほどの台地平坦部に位置している。調査面積は169.26m²で、現況は山林である。



第4図 梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳周辺図

第2節 歴史的環境

行方・鹿島の両台地にはさまれた北浦の北部湖岸に位置する銚田町には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多数存在している。生活環境としての地形と水資源に恵まれ、湖の両岸に沿うように張り出した台地上は、原始・古代から人々の生活舞台となってきた。

銚田町には、『茨城県遺跡地図』⁽¹⁾によると、縄文時代27遺跡、弥生時代4遺跡、縄文～弥生時代9遺跡、奈良・平安時代2遺跡、鎌倉・室町時代20遺跡、江戸時代1遺跡の計63遺跡が確認されている。

先土器時代の遺跡は、尖頭器の出土が報告されている銚田川(七瀬川)流域の徳宿遺跡⁽²⁾(1)が存在する他には現在は確認されていない。

縄文時代になると、県内各地に貝塚が形成されるようになり、現在までに県内で350か所ほど発見されており、当町においても14か所確認されている。しかし、各貝塚とも発掘調査はほとんどなされておらず、以後述べる各時代の遺跡も発掘調査が実施されたものは少ない。この時代の遺跡は巴川と銚田川によって開析された台地上に広く分布がみられる。巴川流域には、出土遺物等により早期～前期の串挽貝塚⁽³⁾(2)、中期の串挽権現平貝塚⁽⁴⁾(3)や富田貝塚⁽⁴⁾(4)、青柳貝塚⁽⁵⁾(5)、中の宮遺跡⁽⁶⁾(6)、鳥栖遺跡⁽⁷⁾(7)、坂戸遺跡⁽⁸⁾(8)等が存在する。銚田川流域では、中期の飯名貝塚⁽⁹⁾(9)、秋山遺跡⁽¹⁰⁾(10)、徳宿遺跡、晩期の鎌田遺跡等が存在する。

弥生時代の遺跡としては、徳宿遺跡⁽¹¹⁾(11)、畑田遺跡⁽¹²⁾(12)、安塚遺跡⁽¹³⁾(13)、塙遺跡⁽¹³⁾(13)が確認されている。出土遺物の多くは後期の十王台式土器であるが、徳宿遺跡や安塚遺跡からは中期の足洗式土器が出土しており、銚田川の支流に面した台地上に集落を営んでいたものと考えられる。

古墳時代になると、階級社会が成立し、豪族は支配者として大きな権力を持ち、各地に高塚や墳墓を築造するようになった。巴川や銚田川の流域にも古墳群や集落の形成がみられる。巴川流域には、「ひざまづく男」や「壺をささげる女子」等の人物埴輪を出土した不二内古墳群⁽¹⁴⁾(14)や狐塚古墳群⁽¹⁵⁾(15)、借宿古墳群⁽¹⁶⁾(16)、十石台古墳群⁽¹⁷⁾(17)、茂平前古墳⁽¹⁸⁾(18)、円満寺古墳群⁽¹⁹⁾(19)、鳥栖古墳⁽²⁰⁾(20)、割塚古墳群⁽²¹⁾(21)等が存在する。銚田川流域にも、山王古墳群⁽²²⁾(22)富士峯古墳群⁽²³⁾(23)のほかに、須恵器・鉄鏃が出土した7世紀(中葉)から8世紀(初頭)に位置づけられる安房西古墳群⁽²⁴⁾(24)が存在している。集落跡では巴川流域に浦房地遺跡⁽²⁵⁾(25)、辰の峯遺跡⁽²⁶⁾(26)、銚田川流域に中期から後期にかけての塙遺跡、畑田遺跡等が存在している。

歴史時代になると、中世においては城館跡が中心となり、現在までに21カ所確認されている。常陸大掾氏の支族である鹿島氏一族の徳宿氏の築いた徳宿城跡⁽²⁷⁾(27)、安房氏の築いた三階城跡⁽²⁸⁾(28)、畑田氏の築いた畑田城跡⁽²⁹⁾(29)のほかに、各地に城館や砦跡が残っている。巴川流域には、

武田通信の築いた野友城跡(30)のほかに、郷土砦跡(31)、堀ノ内砦跡(32)、厩砦跡(33)等が存在している。

近世における銚田町は、北浦・巴川の水運を利用した物資の集積地として重要な位置を占め、内陸水路の要所として発展した。これは、水戸藩をはじめ、奥州諸藩と江戸を結ぶ物資の中継地になっていたためであり、酒沼の海老沢から巴川河岸紅葉をつなぐ堀運河が、水戸藩の藩営工事として行なわれ、大川・紅葉地区に紅葉の勘十郎堀跡(36)が存在している。

このように、茨城県の南東部に位置する銚田町は、原始・古代から各時代にわたって人々の生活が営まれてきたことが窺える。

※ 遺跡名の次の（ ）内の数字は、第1表の図中番号である。

注・参考文献

- (1) 「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1987年
- (2) 「茨城県史料」 考古資料編 先土器・縄文時代 茨城県 1979年
- (3)(4) 「県内貝塚における動物遺存体の研究」 学術調査概報3 茨城県歴史館 1980年
- (5) 「鹿島線関係遺跡発掘調査報告書」 徳宿・埜・畑田・安塚遺跡・安房西古墳群 茨城県教育財団 1980年
- (6) 「茨城県史料」 考古資料編 古墳時代 茨城県 1974年
- (7) 「日本城郭大系 第4巻」 新人物往来社 1979年
- (8) 「郷土北浦 第6号」 北浦郷土文化研究会 1983年



第5図 梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳周辺の遺跡位置図

表1 梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳周辺遺跡一覧表

| 図中 番号 | 遺跡名 | 遺跡の時代 | | | | | | | 図中 番号 | 遺跡名 | 遺跡の時代 | | | | | | |
|----------|---------|-------|----|----|----|-----|-----|----|----------|----------|-------|----|----|----|-----|-----|----|
| | | 先土器 | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 奈・平 | 鎌・室 | 江戸 | | | 先土器 | 縄文 | 弥生 | 古墳 | 奈・平 | 鎌・室 | 江戸 |
| 1 | 徳宿遺跡 | ○ | ○ | ○ | | | | | 19 | 円満寺古墳群 | | | | ○ | | | |
| 2 | 串挽貝塚 | | ○ | | | | | | 20 | 鳥栖古墳 | | | | ○ | | | |
| 3 | 串挽権現平貝塚 | | ○ | | | | | | 21 | 割塚古墳群 | | | | ○ | | | |
| 4 | 富田貝塚 | | ○ | | | | | | 22 | 山王古墳群 | | | | ○ | | | |
| 5 | 青柳貝塚 | | ○ | | | | | | 23 | 富士峯古墳群 | | | | ○ | | | |
| 6 | 中の宮遺跡 | | ○ | | | | | | 24 | 安房西古墳群 | | | | ○ | | | |
| 7 | 鳥栖遺跡 | | ○ | | | | | | 25 | 浦房地遺跡 | | ○ | ○ | | | | |
| 8 | 坂戸遺跡 | | ○ | | | | | | 26 | 辰の峯遺跡 | | ○ | ○ | | | | |
| 9 | 飯名貝塚 | | ○ | | | | | | 27 | 徳宿城跡 | | | | | | | ○ |
| 10 | 秋山遺跡 | | ○ | | | | | | 28 | 三階城跡 | | | | | | | ○ |
| 11 | 徳宿遺跡 | | | ○ | | | | | 29 | 畑田城跡 | | | | | | | ○ |
| 12 | 畑田遺跡 | | | ○ | ○ | | | | 30 | 野友城跡 | | | | | | | ○ |
| 13 | 埴遺跡 | | | ○ | ○ | | | | 31 | 郷土砦跡 | | | | | | | ○ |
| 14 | 不二内古墳群 | | | | ○ | | | | 32 | 堀ノ内砦跡 | | | | | | | ○ |
| 15 | 狐塚古墳群 | | | | ○ | | | | 33 | 廠砦跡 | | | | | | | ○ |
| 16 | 借宿古墳群 | | | | ○ | | | | 34 | 梨ノ子木久保遺跡 | 当遺跡 | | | | | | |
| 17 | 十石台古墳群 | | | | ○ | | | | 35 | 割り塚古墳 | 当遺跡 | | | | | | |
| 18 | 茂平前古墳群 | | | | ○ | | | | 36 | 紅葉の勘十郎堀跡 | | | | | | | ○ |

注 36の紅葉の勘十郎堀跡については紙面の制約上、第5図には付さなかった。

第3章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は、下記の要領で統一した。

1 使用記号

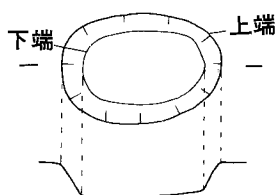
土坑 — SK

2 土層の分類

当遺跡で検出された遺構の土層の色調については、「新版標準土色帖」(小山忠正・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用し、図版実測図中に記載した。

3 遺構実測図の作成方法と記載方法

土坑



① 土坑は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに2分の1に縮少して掲載した。

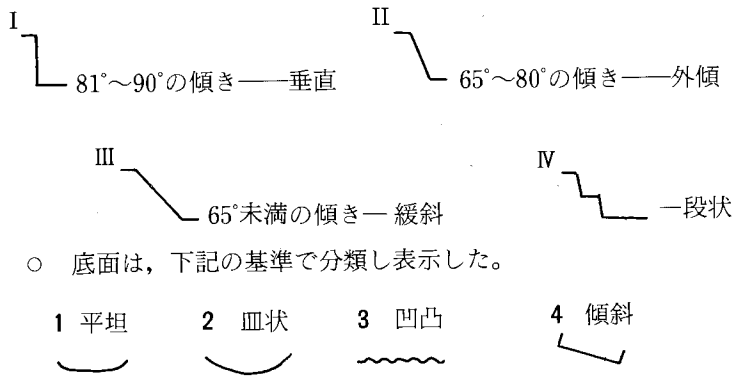
② 土坑実測図の記載については、遺構番号順に掲載した。

③ 水系レベルはm単位で掲載した。

4 土坑一覧表

| 土坑 番号 | 位 置 | 長径方向 | 平面形 | 規 模 | | 壁 面 | 底 面 | 覆 土 | 出土遺物 | 備 考 |
|----------|-----|------|-----|----------|--------|-----|-----|-----|------|-----|
| | | | | 長径×短径(m) | 深さ(cm) | | | | | |
| | | | | | | | | | | |

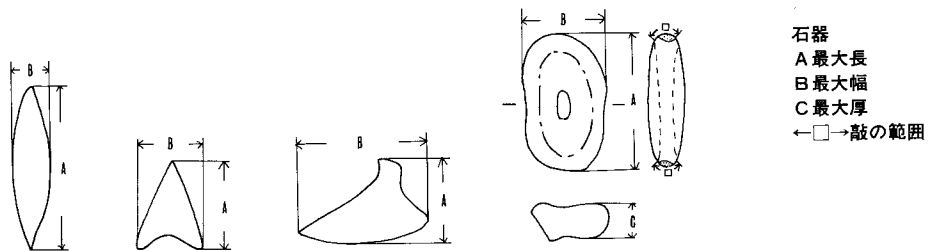
- 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。
- 位置は、遺構が占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。
- 長径方向は、座標北をN-0°とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。
- 平面形は、掘り込み上面の形状を記し、円形・楕円形の場合には下記の分類基準を設けてそれによって分類した。
 - ・円形 (短径：長径=1：1.2未満のもの)
 - ・楕円形(短径：長径=1：1.2以上のもの)
- 規模の欄の長径×短径は、上面の計測値(m)で表した。
- 規模の欄の深さは、確認面から坑底の最も深い部分での計測値である。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。



第2節 遺物の記載方法

本跡から出土した遺物については、実測図・拓影図・写真等により掲載した。

1 各部位の名称と法量表現



2 拓影図は、断面図を右側に掲載した。表裏両面を掲載した場合は、断面を中央に配し、外面を左側、内面を右側とした。

3 石器の実測図は、三角図法を用い、左側面を軸に反転し作図した。

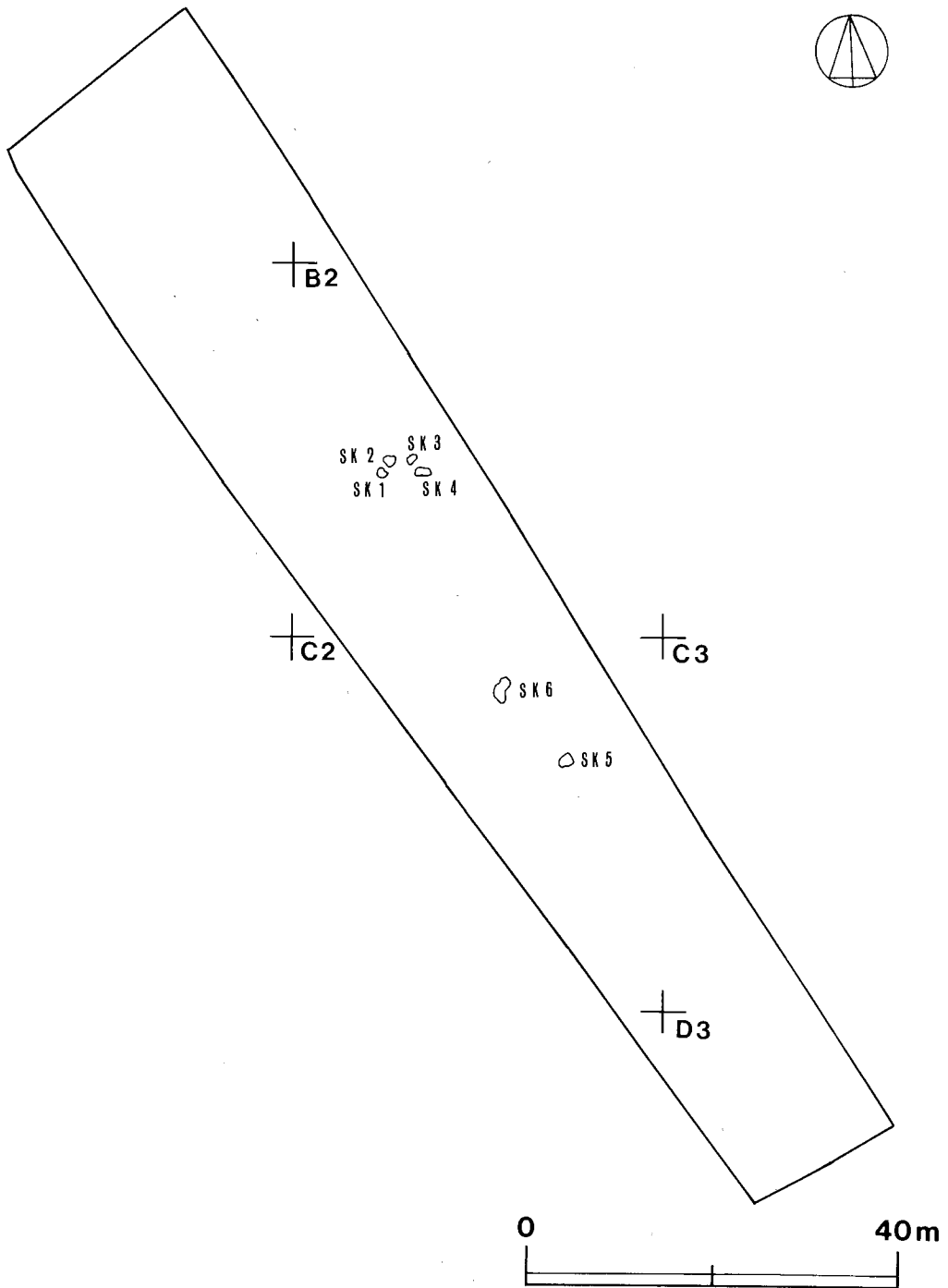
4 遺物は、原則として3分の1に縮小して掲載した。しかし、遺物の大きさ等により、それ以外の縮尺を使用した場合もある。

5 石器観察表

| 図版番号 | 台帳番号 | 器種 | 出土地点 | 全長(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 石質 | 備考 |
|------|------|----|------|--------|-------|--------|-------|----|----|
| | | | | | | | | | |

- 図版番号は、本報告書に掲載した実測図の番号である。
- 器種は、同一器種別にまとめて掲載した。
- 出土地点は、その石器が出土した遺構や小調査区名で表した。
- 全長・幅・厚さは、「各部位の名称と法量表現」に従った。
- () 内は現存値である。

第4章 梨ノ子木久保遺跡



第6図 梨ノ子木久保遺跡遺構配置図

第1節 遺跡の概要

梨ノ子木久保遺跡は、銚田町の市街地中央部から北西約7.6kmに位置し、巴川の支流が形成する低湿地に舌状に張り出した標高29m前後の台地の縁辺部に所在する。

調査の結果、6基の土坑が検出された。土坑は遺跡のほぼ中央部に分布し、平面形は楕円形、不整楕円形、不整長楕円形を呈する。遺物の出土は少ないが、出土した遺物から縄文時代前期に比定されるものと思われる。また、遺物の出土がない他の土坑についても位置、覆土の堆積状況及び遺構周辺の出土遺物などから、ほぼ同時期に比定される。土坑内出土の遺物は、前期の黒浜式・浮島式の縄文式土器片、尖頭器・石匙の石器である。しかし、第1号土坑出土の尖頭器は、伴う遺物が出土していないため、土坑と同時期に位置づけられる遺物ではなく時間的差異があるものと考えられる。

遺構外から出土した遺物は、多量の縄文式土器と少量の須恵器、石器等である。縄文式土器は前期の黒浜式・諸磯式・浮島式の土器片が多く出土している。他に、縄文時代早期の沈線文系土器、同前期の興津式、同中期の五領ヶ台式・阿玉台式・加曾利E式の土器片が出土している。須恵器は8世紀末に比定される坏蓋が1点出土している。石器は、極少量であるが石鏃・石槍・敲石等が出土している。

第2節 土坑と出土遺物

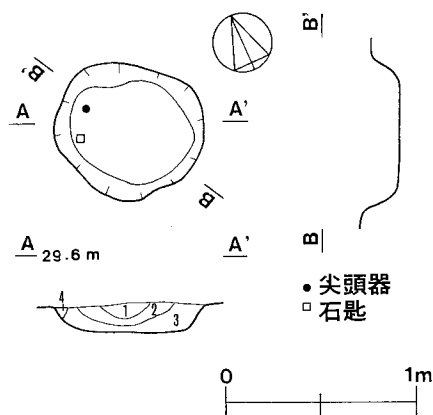
1 土坑

第1号土坑（第7・8図）

本跡は、遺跡の中央部 B2f3区に確認された。本跡の東3.5m に第4号土坑、北2 m に第2号土坑、北東2.9m に第3号土坑が存在している。

平面形は、長径0.76m・短径0.67mの不整円形を呈し、長径方向はN-43°-Wである。壁はハードロームで、70度の角度で外傾して立ち上がっている。深さは現状で約16cmであるが、地域の話によると、当遺跡の中央部を通過する農道の北西側は、数年前に重機による削平がなされており、削平以前の表土下1 mのハードローム層の一部まで耕作土となっていることから、本来はもっと深かったものと考えられる。底面はハードローム層を掘り下げており、南壁下部付近はやや凹凸を呈するが、全体としては硬く締まっている。

覆土は3層で、レンズ状に自然堆積の様相を示している。上層はローム粒子・ローム小ブロックを少量含む黒褐色土、中層はローム粒子を少量含む褐色土、下層はローム粒子中量・ハードロー



SK-1 土層解説

1. Hue 7.5YR 3/2 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子を少量含む褐色土
3. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子・ハードロームブロック少量を含む褐色土
4. Hue 7.5YR 5/4 ローム粒子を多量に含むぶい褐色土

第7図 第1号土坑実測図

ムブロックを少量含む褐色土で、締まりのある堆積状態を示している。

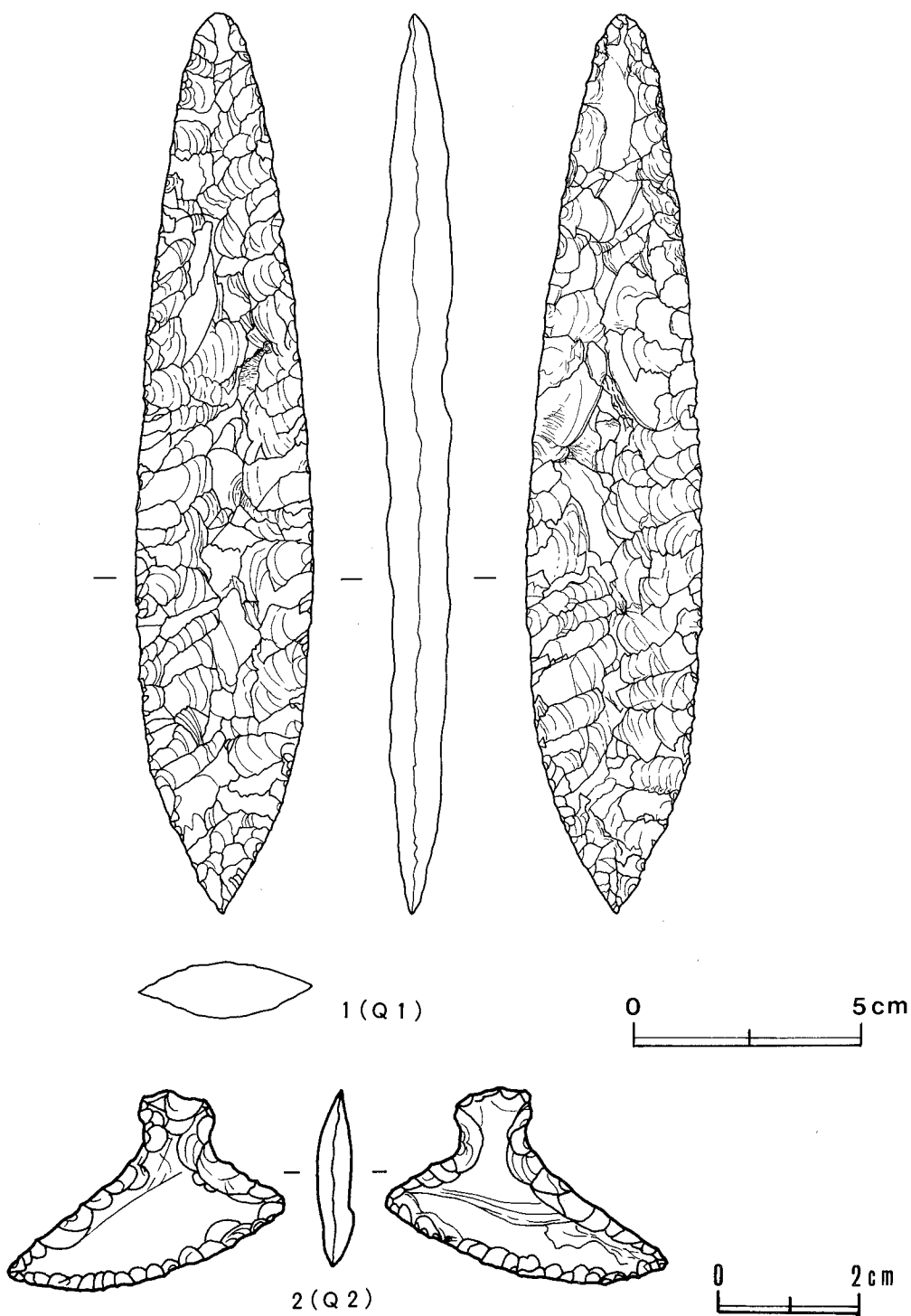
遺物は、尖頭器1点(第8図1)、石匙1点(第8図2)がほぼ同じレベルで、西から北西の壁寄りの底面上に横位の状態で出土した。1(Q1)は全体の形が整った柳葉形の尖頭器で、完形品である。断面形は凸レンズ状を呈し、尖頭部及び基部は鋭利であり、全体に押圧剝離による入念な調整が表裏両面から交互に施されている。法量は、全長19.5cm・幅3.9cm・厚さ1.6cm・重さ108.4gで、石質は頁岩である。先土器時代末期の所産と考えられる。2(Q2)は全体として三角形を呈する横形石匙の完形品である。側辺部は直線的であり、刃部は弧状に張り出している。基部及びつまみにも調整が施され、丁寧に作り出されている。つまみと反対側の刃部及び側辺部にも表裏両面から交互に押圧剝離による調整が施されている。法量は、全長2.9cm・幅4.0cm・厚さ0.5cm・重さ4.1gで、石質はチャートである。

第2号土坑(第9図)

本跡は、遺跡の中央部 B2f3区に確認された。本跡の東1.4mに第3号土坑、南2mに第1号土坑が存在している。

平面形は、長径0.94m・短径0.77mの不整楕円形を呈し、長径方向はN-30°-Eである。壁は北側及び南西側の一部がオーバーハングする他は、ほぼ垂直に立ち上がっている。深さは現状で約32cmであるが、確認面が第1号土坑と同じような理由でハードローム層であったため、本来はもっと深かったものと考えられる。底面はハードローム層を掘り下げており、北東壁下部付近は小さな凹凸を呈するが、全体的に平坦で硬く締まっている。

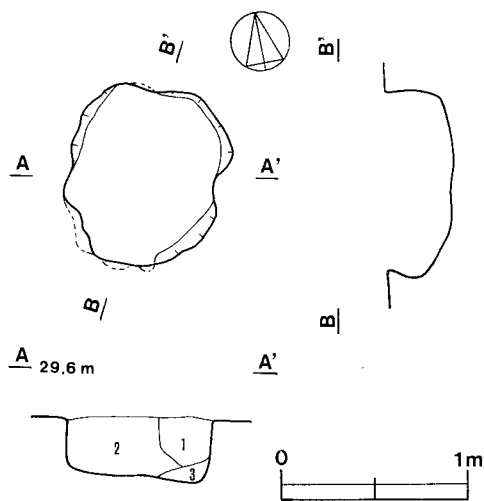
覆土は、褐色土が3層に分かれて堆積している。上層はハードロームブロック・ローム粒子を含む褐色土で、ハードロームブロックは、壁面のハードローム土が崩落したものと思われる。下層の褐色土はローム粒子を含みレンズ状に堆積している。いずれも締まりのある土層で自然堆積



第8図 第1号土坑出土遺物実測図(尖頭器・石匙)

している。

遺物は出土しない。

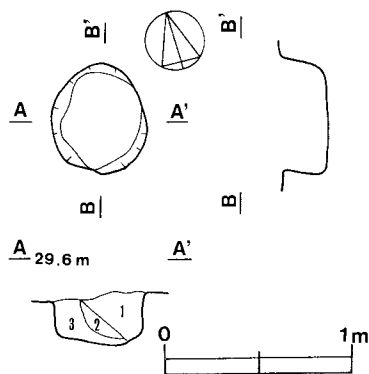


第9図 第2号土坑実測図

第3号土坑 (第10・11図)

本跡は、遺跡の中央部 B2f4区に確認された。本跡の西1.4m に第2号土坑、南東2.1m に第4号土坑が存在している。

平面形は、長径0.63m・短径0.48mの楕円形を呈し、長径方向はN-20°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。南壁及び北壁の一部にはトレンチャー痕が入っている。深さは現状で約26cmであるが、本跡の確認面が第1・2号土坑と同様な理由で既にハードローム層であったため、本来はもっと深かったものと考えられる。底面はハードローム層まで掘り下げられており、



第10図 第3号土坑実測図

SK-2 土層解説

1. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子・ハードロームブロック (中・大) 中量を含む褐色土
2. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子・ハードローム小ブロック 少量を含む褐色土
3. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子少量を含む褐色土

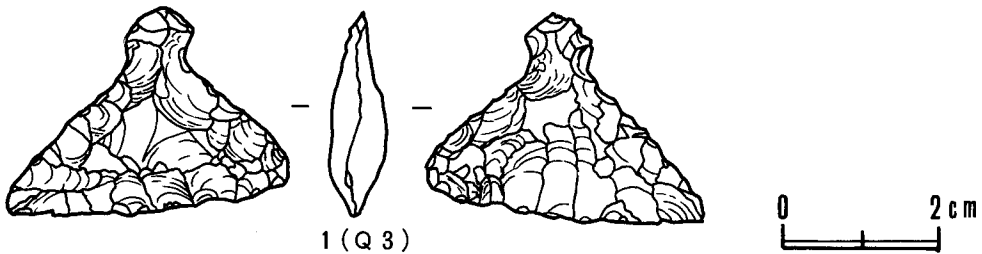
SK-3 土層解説

1. Hue 7.5YR 6/6 ローム粒子多量、ハードローム小ブロック少量を含む橙色土
2. Hue 7.5YR 2/2 ローム粒子・ハードローム小ブロック少量を含む黒褐色土
3. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子・ローム小ブロック少量を含む褐色土

小さな凹凸がみられるが、全体的には平坦で硬く締まっている。

覆土は橙色土・黒褐色土・褐色土の3層からなり、それぞれがローム粒子・ハードロームブロックを含み締まっている。各層に含まれるハードロームブロックは、壁面のハードローム土が崩落したものと思われる。

遺物は、確認面の覆土上層から石匙(第11図)が1点出土しただけである。1(Q3)は正三角形を呈する横形石匙の完形品で、側辺部及び刃部は直線的である。基部及びつまみにも調整が施され、丁寧に作り出されている。つまみと反対側の刃部及び側辺部にも表裏両面から交互に押圧剝離による調整が施されている。法量は、全長2.8cm・幅3.7cm・厚さ0.8cm・重さ5.1gで、石質はチャートである。形態及び調整方法の点で、第1号土坑出土の石匙と極めて類似している。

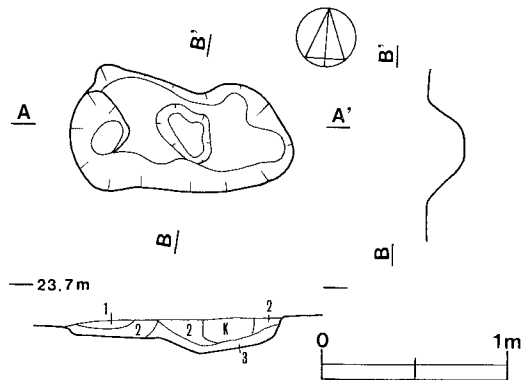


第11図 第3号土坑出土遺物実測図

第4号土坑(第12図)

本跡は、遺跡の中央部のB2f4区に確認された。本跡の西3.5mに第1号土坑、北西2.1mに第3号土坑が存在している。

平面形は、長径1.17m・短径0.5mの不整長楕円形を呈し、長径方向はN-88°-Eである。北壁と南壁は底面からゆるやかなカーブを描きながら35度前後の角度で立ち上がり、東壁及び西壁は外傾しながら立ち上がっている。深さは現状で最深部が約21cmであるが、前述の土坑と同じ理



第12図 第4号土坑実測図

SK-4 土層解説

1. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子少量を含む褐色土
2. Hue 7.5YR 3/2 ローム粒子少量を含む黒褐色土
3. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子中量、ハードローム小ブロック少量を含む褐色土

K. 攪乱

由で本来はもっと深かったものと考えられる。底面はハードローム層を掘り下げており、中央部及び西壁下部に浅いピットが掘られ、東壁下部付近は凹凸を呈する。

覆土は3層で、自然堆積の様相を示している。上位の2層はローム粒子を少量含む褐色土と黒褐色土、下層はローム粒子中量及びハードローム小ブロック少量を含む褐色土である。いずれも締まりのある土層であるが、上位の黒褐色土層には耕作に伴うトレンチャーによる攪乱がみられる。

遺物は出土していない。

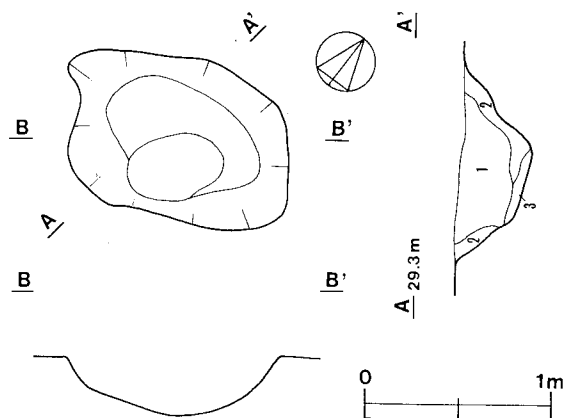
第5号土坑（第13図）

本跡は、C2d8区に確認された。本跡の北東9.8mに第6号土坑が存在している。

平面形は、長径1.14m・短径0.86mの不整楕円形を呈し、長径方向はN-66°-Eである。南西壁及び北東壁はゆるやかなカーブを描きながら20度前後の角度で立ち上がり、北西壁及び南東壁は60度の角度で外傾しながら立ち上がっている。深さは中央部で約32cmである。底面は南東から北西方向にかけてゆるく傾斜している締まりのあるローム土である。

覆土は3層で、レンズ状に自然堆積の様相を示している。上層は極めて硬く締まった黒褐色土で厚く堆積し、中層は極めて締まっている暗褐色土、下層は締まりのある褐色土である。いずれもローム粒子を含んでいる。上層にはトレンチャーによる攪乱がみられる。

遺物は出土していない。



SK-5 土層解説

1. Hue 7.5YR 2/2 ローム粒子少量を含む黒褐色土
2. Hue 7.5YR 3/3 ローム粒子少量を含む暗褐色土
3. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子多量を含む褐色土
4. Hue 7.5YR 6/6 ローム粒子多量、暗褐色土少量含む橙色土

第13図 第5号土坑実測図

第6号土坑（第14・15図）

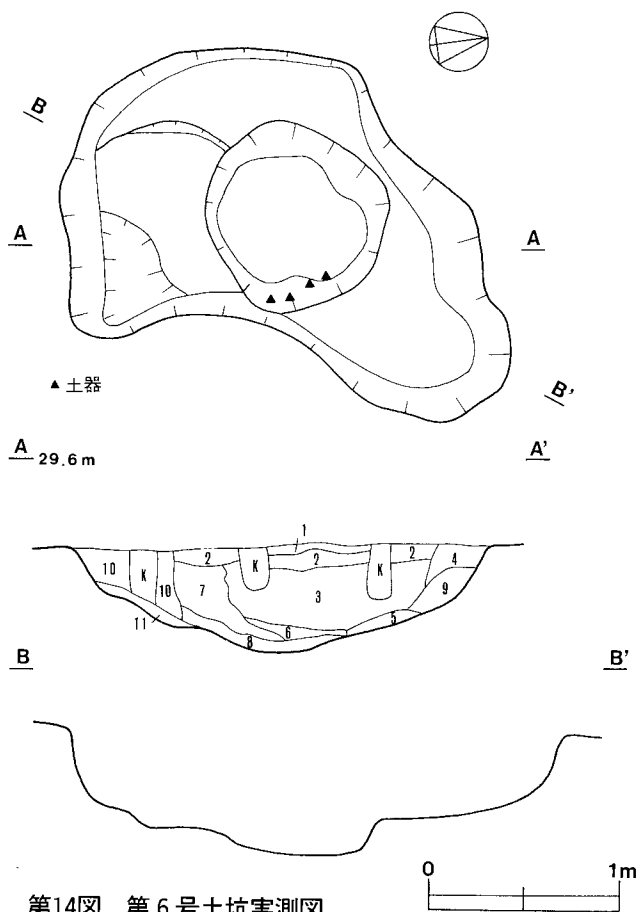
本跡は、C2b6区に確認された。本跡の南西9.8mに第5号土坑が存在している。

平面形は、長径2.63m・短径1.33mの不整楕円形を呈し、当遺跡で検出された土坑では最大

の規模を有する。長径方向はN-37°-Eである。南壁はゆるやかなカーブを描きながら50度の角度で緩傾し、北壁は70度の角度で外傾して立ち上がり、いずれもローム土である。深さは中央部で約66cmであり、当遺跡内の土坑では最も深い。底面は、ほぼ中央部に深さ約18cmの皿状の掘り込みを有し、北東壁下付近が小さな凹凸を呈する他はほぼ平坦で、締まりのあるローム土である。

覆土は11層からなり、レンズ状に自然堆積の様相を示している。なお、上層には耕作に伴うトレンチャー痕が畝状に入り攪乱を受けている。上層は暗褐色土でローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子を極少量含み、10cm程の厚さで水平に堆積している。中層は黒褐色土と褐色土が厚く堆積しており、いずれもローム粒子・炭化粒子を極少量含んでいる。下層はローム粒子を多量に含む橙色土及びローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む黒褐色土が薄く堆積している。なお、壁際にはロームブロック・ハードロームブロックを少量含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層である。

遺物は、覆土下層及び底面直上から縄文式土器片61点が出土しており、細破片を除いた23点について拓影図（第15図）に掲載した。1～3は縄文時代前期前葉の黒浜式に比定される口縁部及

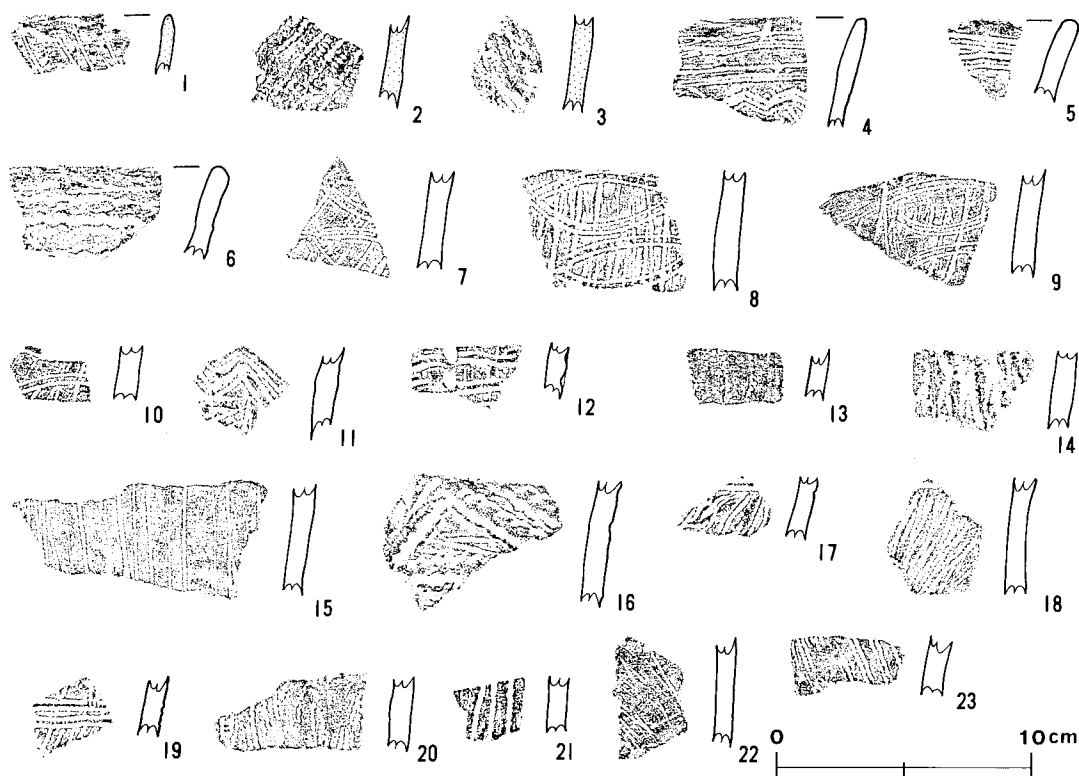


第14図 第6号土坑実測図

SK-6 土層解説

- 1. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子中量を含む
にぶい橙色土
- 2. Hue 7.5YR 3/3 ローム粒子・焼土粒子・
炭化粒子少量を含む暗
褐色土
- 3. Hue 7.5YR 2/2 ローム粒子・炭化物少
量を含む粘性のある黒
褐色土
- 4. Hue 7.5YR 4/3 ロームをブロック状に
少量含む褐色土
- 5. Hue 7.5YR 3/2 ロームをブロック状に
少量含む黒褐色土
- 6. Hue 7.5YR 3/2 ローム粒子・焼土粒子・
炭化粒子少量を含む黒
褐色土
- 7. Hue 7.5YR 4/3 ローム粒子中量、炭化
粒子極少量を含む褐色
土
- 8. Hue 7.5YR 6/6 ローム粒子多量、黒褐
色土少量を含む橙色土
- 9. Hue 7.5YR 4/4 ローム粒子多量、ハー
ドローム小ブロック少
量を含む褐色土
- 10. Hue 7.5YR 5/4 ローム粒子多量、ハー
ドローム小ブロック少
量を含むにぶい褐色土
- 11. Hue 7.5YR 6/6 ローム粒子を多量に含
み、粘性のある橙色土
攪乱
- K.

び胴部の破片である。1は口縁部上位から沈線が斜位に施されている。2・3は単節の縄文が斜位に施された胴部片である。いずれも胎土に繊維を含んでいる。4～23は同前期中葉の浮島式に比定される口縁部及び胴部の破片である。4～6は口縁部片である。4は口縁部上位に沈線を横位に巡らし、下位に半截竹管による平行沈線が山形状に施されている。5は口縁部上位に半截竹管による平行沈線が横位に施されている。6は口縁部上位に変形爪形文が施されている。7～23は胴部片である。7～10は撚糸文を地文とし、半截竹管による平行沈線が木葉状に施されている。11は平行沈線が山形状に施されている。12は平行沈線を横位・波状に巡らし、沈線上に縦位の刺突が施されている。13・14はアナガラ科の貝殻腹縁を使用した波状貝殻文が施されている。15は沈線が縦位に施されている。16は変形爪形文が横位・山形状に施されている。17・18は平行沈線を横位に巡らし、以下は撚糸文が雑に施されている。19は撚糸文を地文とし、半截竹管による平行沈線が横位に2条施されている。20～22は撚糸文が斜位に施されている。23は2本組の撚糸文が斜位に施されている。



第15図 第6号土坑出土遺物拓影図

表2 土坑一覧表

| 土坑 番号 | 位置 | 長径方向 | 平面形 | 規 模 | | 壁面 | 底面 | 覆土 | 出土遺物 | 備 考 |
|----------|--------|---------|--------|-----------|--------|----|----|----|------------------------|-----|
| | | | | 長径×短径(m) | 深さ(cm) | | | | | |
| 1 | B2 f 3 | N-43°-W | 不整形 | 0.76×0.67 | 16 | 外傾 | 平坦 | 自然 | 尖頭器1点石匙1点 | |
| 2 | B2 f 3 | N-30°-E | 不整楕円形 | 0.94×0.77 | 32 | 垂直 | 平坦 | 自然 | なし | |
| 3 | B2 f 4 | N-20°-E | 楕円形 | 0.63×0.48 | 26 | 垂直 | 平坦 | 自然 | 石匙1点 | |
| 4 | B2 f 4 | N-88°-E | 不整長楕円形 | 1.17×0.50 | 21 | 緩斜 | 凹凸 | 自然 | なし | |
| 5 | C2 d 8 | N-66°-E | 不整形楕円形 | 1.14×0.86 | 32 | 外傾 | 皿状 | 自然 | なし | |
| 6 | C2 b 6 | N-37°-E | 不整楕円形 | 2.63×1.33 | 66 | 外傾 | 平坦 | 自然 | 縄文式土器片61点 (黒浜式、浮島式) | |

第3節 遺構外出土遺物

1 土器

(1) 縄文式土器

縄文式土器はすべて破片で、早期から中期にかけてのものが出土している。これらの土器片を時期と文様などの特徴から、次のようにVI群に分類した。

I群の土器（第16図1～8）

縄文時代早期中葉の土器を本群とする。

1～3は口縁部片である。1は口縁が内削ぎ状を呈し、外面は沈線が斜位に施されている。2は口縁が角頭状を呈し、外面は無文でザラザラしている。3は口縁が角頭状を呈し、外面は横位のナデ調整がみられる。

4～6は胴部片である。4は押圧を斜位に施し、以下は細い沈線が横位に施されている。5・6はアナガラ科の貝殻腹縁が縦位・斜位に押圧されている。

7・8は尖底土器の底部である。7は外面に縦位の削り痕が認められ、器面が滑らかで先端部は鋭く尖っている。8は外面に斜位の削り痕が認められるが、器面はザラザラである。7・8は三戸式に比定される。

II群の土器

縄文時代前期前葉の土器を本群とする。

a類（第16図9～39）

黒浜式に比定される土器を本類とする。

9～17は口縁部片である。9は口縁部上位に半截竹管による平行沈線が横位に2条巡り、以下は縦位・斜位に施されている。10は口縁部上位から沈線が横位に浅く施されている。11・12は半截竹管による連続的な刺突文が横位に施されている。13・14は口縁部上位から斜位の沈線を交互に施し、格子文を描いている。15・16は口縁部上位から単節の縄文が斜位に施されている。15はRLの縄文で口唇部に浅い押圧が施され、16はLRの縄文である。17は口縁部上位に横位のナデ調整を施し、以下は単節RLの縄文が斜位に施されている。

18～39は胴部片である。18～20は沈線を方向を変えて斜行させた格子文が施されている。21は半截竹管による平行沈線を横位・縦位・斜位に施し、肋骨文を構成している。22は横位・弧状に施された平行沈線上に円形竹管文を縦位に刺突し、以下は縄文が斜位に施されている。23・24は半截竹管による押引き文が施されている。23は横位・縦位・斜位に押引き文が施され、交点に浅い押圧が施されている。24は斜位に施されている。25は半截竹管による連続的な刺突文が曲線的に施されている。26は連続的に横位に施された刺突文間に、沈線が斜位に施されている。27は平行沈線が波状に施され、外面から補修孔が穿たれている。28・29は多条の沈線が横位に施されている。30は2本組の撚糸文で、単節LRの撚糸文が斜位に施されている。31は無節の縄文が横位に施されている。32・33は単節LRの縄文が斜位に施されている。34は櫛歯状工具による沈線が波状に施されている。35は横位の低い隆帯に斜位のキザミ目を施し、隆帯の上下には半截竹管による連続的な刺突文が横位に施されている。36・37はアナガラ科の貝殻腹縁が縦位に押圧されている。38・39は底部片で、いずれも平底である。38の胴部外面には多条の沈線が横位に施されている。39は底部が突出し、胴部外面には縄文を斜位に施したことが窺える。

b類 (第17図40)

大木2b式に比定される土器を本類とする。

40は胴部片で、連鎖状撚糸文が全面に横位に施されている。

III群の土器

縄文時代前期中葉から後葉の土器を本群とする。

a類 (第17図41～51)

諸磯a式に比定される土器を本類とする。

41～47は口縁部片である。41は口縁部上位から、3段の連続爪形文が横位に施されている。42・43は口縁部上位に連続爪形文が横位に施され、以下は平行沈線が斜位・鋸歯状に施されている。44は波状口縁で、口唇部にキザミ目を施し、口縁部上位から半截竹管による平行沈線が斜位・弧状に施されている。45・46は口縁部上位に連続爪形文が横位に施され、以下は円形竹管文が刺突されている。なお、46の口縁部には焼成前に穿たれた径10mmの孔がみられる。47は波状口縁で、

縄文を地文とし、横位に連続爪形文と波状沈線文を2段に施し、以下は円形竹管文が刺突されている。

48～51は胴部片である。48～50は縄文を地文とし、48は平行沈線が鋸歯状に施されている。49・50は沈線が横位・波状に施されている。51は連続爪形文を横位に施した上に円形竹管文を施し、以下は縄文が施されている。

b類 (第17図52～60)

諸磯b式に比定される土器を本類とする。

52～57は口縁部片である。52は横位の連続爪形文を2段施し、間に連続爪形文が鋸歯状に施されている。53は横位の隆帯に斜位のキザミ目を施し、上下に連続爪形文を横位に巡らしている。54は口縁部上位に連続爪形文と刺突文を横位に巡らし、以下は平行沈線が斜位に施されている。55・56は平行沈線が横位・波状・鋸歯状に施されている。57は波状口縁で、口縁にそって連続爪形文が施されている。

58～60は胴部片である。58は縄文を地文とし、浮線文が横位に施されている。59は浮線文が、60は連続爪形文が、いずれも曲線的に施されている。

c類 (第17図61～78・18図79～104)

浮島I式に比定される土器を本類とする。

61～81は口縁部片である。61～63は撚糸文を地文にもち、口縁部上位に連続爪形文を横位に巡らし、以下は半截竹管による平行沈線が横位・波状・木葉状に施されている。61は波状口縁で、外面から補修孔が穿たれている。64は無文地で、口縁部上位に連続爪形文を横位に巡らし、以下は半截竹管による平行沈線が波状に施されている。65・66は半截竹管による押し引き文と平行沈線文が施されている。67・68は平行沈線文が密に施されている。69・70は口縁部上位に変形爪形文が横位に施されている。71～73は口縁部上位から沈線文を横位に巡らし、以下は木葉文が施されている。なお、71・72は口唇部に棒状工具による押圧が施されている。74・75はアナガラ科の貝殻腹縁文が斜位に押圧され、74は波状口縁を呈する。76・77は撚糸文を地文とし、口縁部上位に半截竹管による平行沈線を横位に巡らし、以下は木葉状・格子状に施されている。78は波状口縁を呈し、平行沈線が横位に施されている。79・80は無文地で、口縁部上位に平行沈線が横位に施されている。81は半截竹管による平行沈線を横位に2条巡らし、沈線間に同施文具による刺突を連続的に施し、以下は平行沈線が羽状に施されている。なお、外面から補修孔が穿たれている。

82～100は胴部片である。82・83は撚糸文を地文とし、連続爪形文が横位・斜位・曲線的に施されている。84は平行沈線を斜位に施し、交点に縦位の刺突を施した下側に連続爪形文が横位に施文されている。85は平行沈線上に半截竹管による刺突を連続的に施し、以下は平行沈線が山形状に施文されている。86～89はアナガラ科の貝殻腹縁文が施されている。86・87は縦位・斜位に押圧

されており、88・89は波状に施されている。90～93は捺糸文が施されている。94～96は捺糸文を地文にし、半截竹管による平行沈線文が施されている。94は平行沈線を横位・縦位・斜位に施し、交点に刺突を縦位に押圧し肋骨文を構成している。95・96は沈線文が横位・波状に施されている。97は半截竹管による押引き文が横位に施されている。98は平行沈線文が横位・山形状に施され、横位のナデ調整が器面に施されている。99・100は半截竹管による平行沈線を横位に巡らし、沈線間に同施文具による短沈線を斜位に施している。

101～104は底部片である。いずれも小片で、胴部外面に捺糸文が施され、下端が突出している。101・102は平底であり、103は高台状の上げ底を呈している。104は底部が欠損している。

d類 (第18図105～111・19図112～129)

浮島II式に比定される土器を本類とする。

105～118は口縁部片である。105～108は輪積み痕を残し、その下端に凹凸文が施されている。109はアナガラ科の貝殻腹縁文が施されている。110は口縁部上位から連続爪形文が横位に3段施されている。111は波状口縁を呈し、連続爪形文が山形状に施されている。112・113は口縁部上位に1条の連続爪形文を横位に巡らし、以下は平行沈線文が斜位・波状に施されている。114～116は口縁部上位から変形爪形文が横位に施されている。114は口唇部下端に太く短い条線文が斜位に施されている。117は口縁部上部に半截竹管による1条の平行沈線を横位に巡らし、以下は同施文具による短い沈線が横位・斜位に施されている。118は口縁部上位に連続爪形文を横位に巡らし、以下は半截竹管による短い沈線が施されている。

119～128は胴部片である。119～121は変形爪形文が横位・波状に施されている。122・123は多条の平行沈線が、横位・斜位に施されている。124は多条の平行沈線が横位に巡り、沈線上に刺突が縦位に押圧されている。125は2条の連続爪形文を横位に巡らし、以下は平行沈線が波状に施されている。126・127はハマグリ等の放射筋の無い2枚貝の貝殻腹縁を使用した波状貝殻文が横位・斜位に施されている。128はアナガラ科の貝殻腹縁を使用した波状貝殻文が横位に施されている。

129は底部片である。胴部の外面にアナガラ科の貝殻腹縁が縦位・斜位に押圧され、底面は平底である。

e類 (第19図130～134)

浮島III式に比定される土器を本類とする。

130～134は口縁部片である。130・131は口縁部上位に条線文が縦位に施され、以下にアナガラ科の貝殻腹縁が連続的に押圧されている。132～134は口唇部下端にキザミ目を施し、口縁部上位からハマグリ等の放射筋の無い貝殻腹縁を使用した波状貝殻文を横位に巡らし、その下に刺突文が連続的に横位に施されている。

f 類 (第19図135～142)

興津式に比定される土器を本類とする。

135・136は口縁部に短い沈線を格子状に施し、頸部には半截竹管による1条の平行沈線を横位に巡らせている。なお、胴部にはアナガラ科の貝殻腹縁文が緻密に施されている。137は口縁部片で、放射筋の無い貝殻腹縁による波状貝殻文が全面に施されている。138は口縁部片で、アナガラ科の貝殻腹縁による波状貝殻文が全面に施されている。

139～141は胴部片である。139～141はアナガラ科の貝殻腹縁文を緻密に施し、沈線で区画した中の貝殻文を磨消している。

142は底部片で、底部は高台状の上げ底を呈し、胴部外面は無文である。

IV群の土器 (第19図143～147・20図148～152)

縄文時代前期終末の土器を本群とする。

143・144は、口縁部から胴部にかけての破片で、無文の口縁部と縄文を施した胴部が1条の横位の結節縄文により区画されている。145は口縁部片で、全面に縄文が施され2条の結節縄文が横位に巡っている。なお、口唇部に縄文が斜位に押圧されている。146～148は折り返し口縁を呈する口縁部片で、全面に縄文が施されている。148は指頭圧痕を連続的に横位に施した上に、ナデ調整が施されている。

149～152は胴部片である。149・150は縄文が羽状に施されている。151・152は結節縄文を横位に巡らし、以下は縄文が施されている。

V群の土器

縄文時代中期前葉の土器を本群とする。

a 類 (第20図153～161)

五領ヶ台式に比定される土器を本類とする。

153～156は口縁部片である。153は口唇部にキザミ目を施し、口唇部内面には折り返しの痕跡が明瞭にみられ、口縁部下位には刺突が連続して横位に施されている。154は折り返し口縁を呈し、全面に縄文が施されている。155は波状口縁で、口唇部にキザミ目を施し、波頂部から2条の太い沈線が縦位に施されている。156は波頂部の欠損した波状口縁で、口唇部にキザミ目を施し、横位・斜位の平行沈線間に三角形刻文が施されている。

157～161は胴部片である。157・158は結節縄文が横位に施され、159～161は結節縄文が縦位に施されている。

b類 (第20図162・163)

阿玉台式に比定される土器を本類とする。

162は波状口縁を呈する口縁部片で、波頂部は欠損し口唇部にキザミ目が施されている。口縁部上位に折り返しの痕跡が明瞭にみられ、以下は押引き文が斜位に施文されている。163は口縁部から胴部にかけての破片で、横位の隆帯に沿って刺突文が連続的に押圧されている。

VI群の土器

縄文時代中期中葉から後葉にかけての土器を本群とする。

a類 (第20図164～168)

加曽利 E II 式に比定される土器を本類とする。

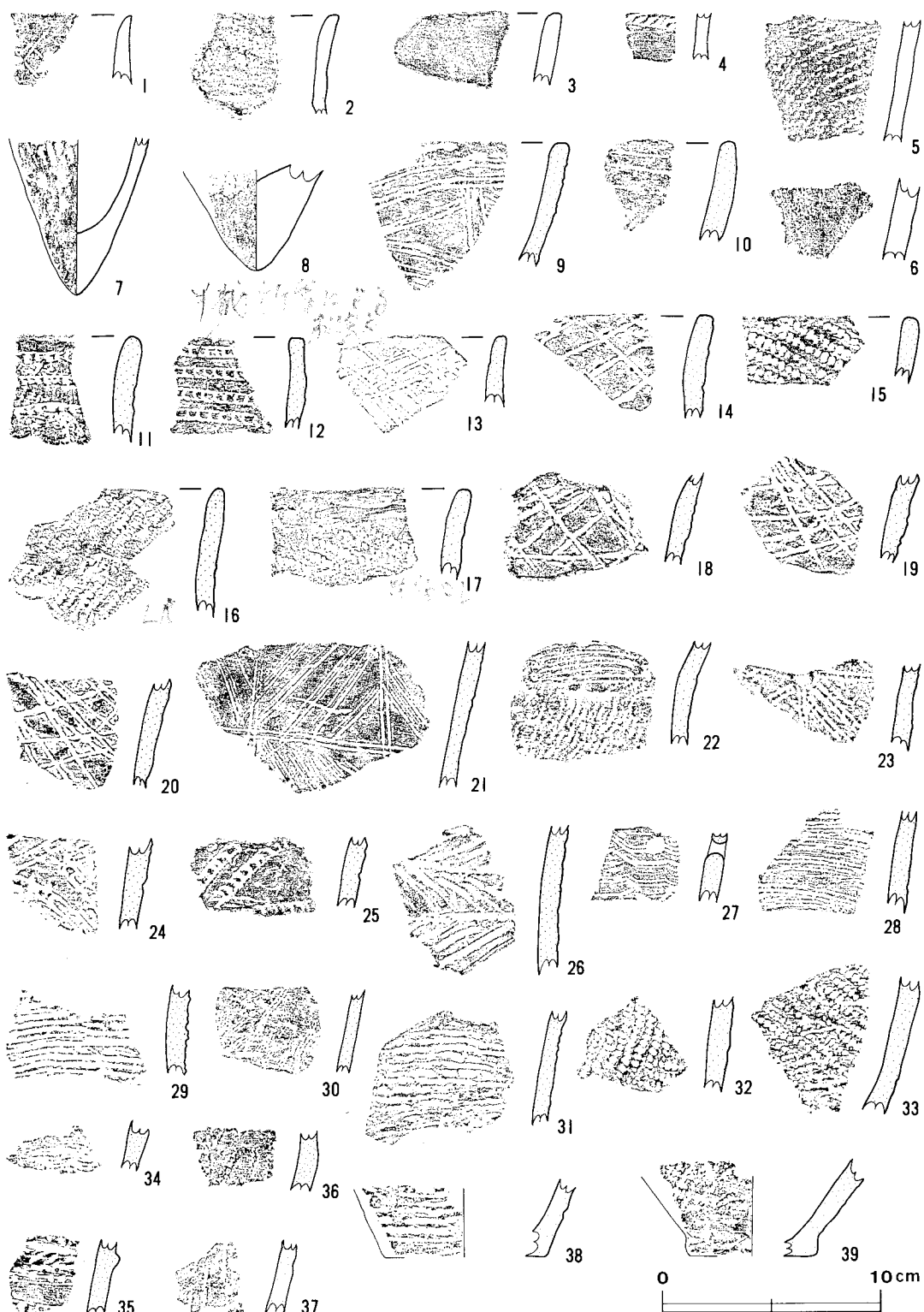
164～168は口縁部及び胴部片である。164は沈線と隆帯によって長方形の区画文が施され、区画内に縄文が施されている。165は口唇部に1条の沈線が施され、口縁部は隆帯によって渦巻文が施されている。166・167は隆帯によって区画された内側に縄文が施されている。168は、横位の隆帯の上下に沈線が施されている。

b類 (第20図169～174)

加曽利 E III 式に比定される土器を本類とする。

169・170は口縁部片である。169は口縁部上位に無文帯を残し、以下は単節の縄文が施されている。170は波状口縁を呈する。口縁部上位に無文帯を残し、曲線的に施された沈線の区画内に縄文が施されている。

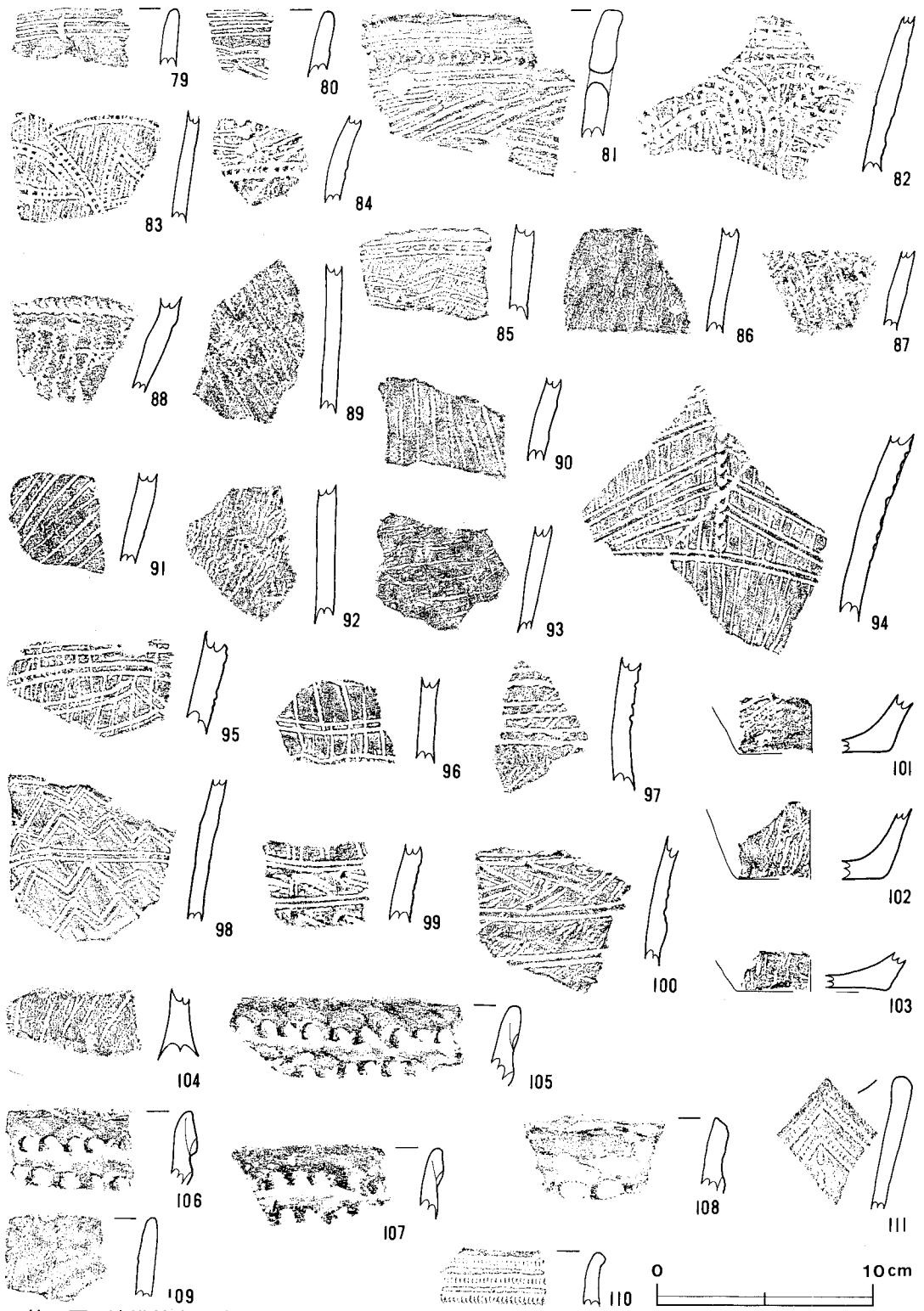
171～174は胴部片である。171・172は磨消帯が垂下し、磨消帯の間に単節の縄文が施されている。173は直線的な磨消縄文帯が垂下している。174は条線文が縦位に施されている。



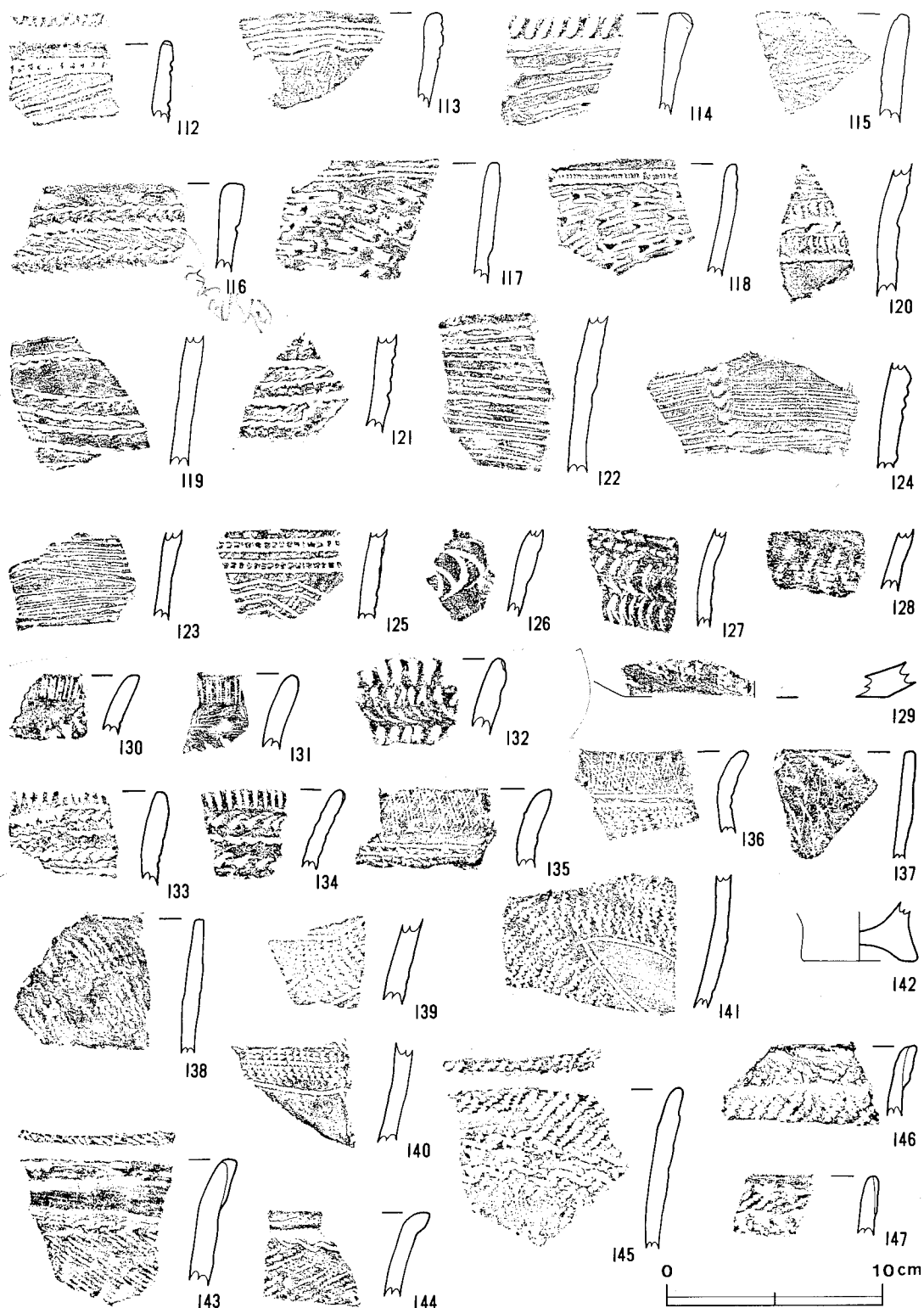
第16图 遺構外出土遺物拓影图(1)



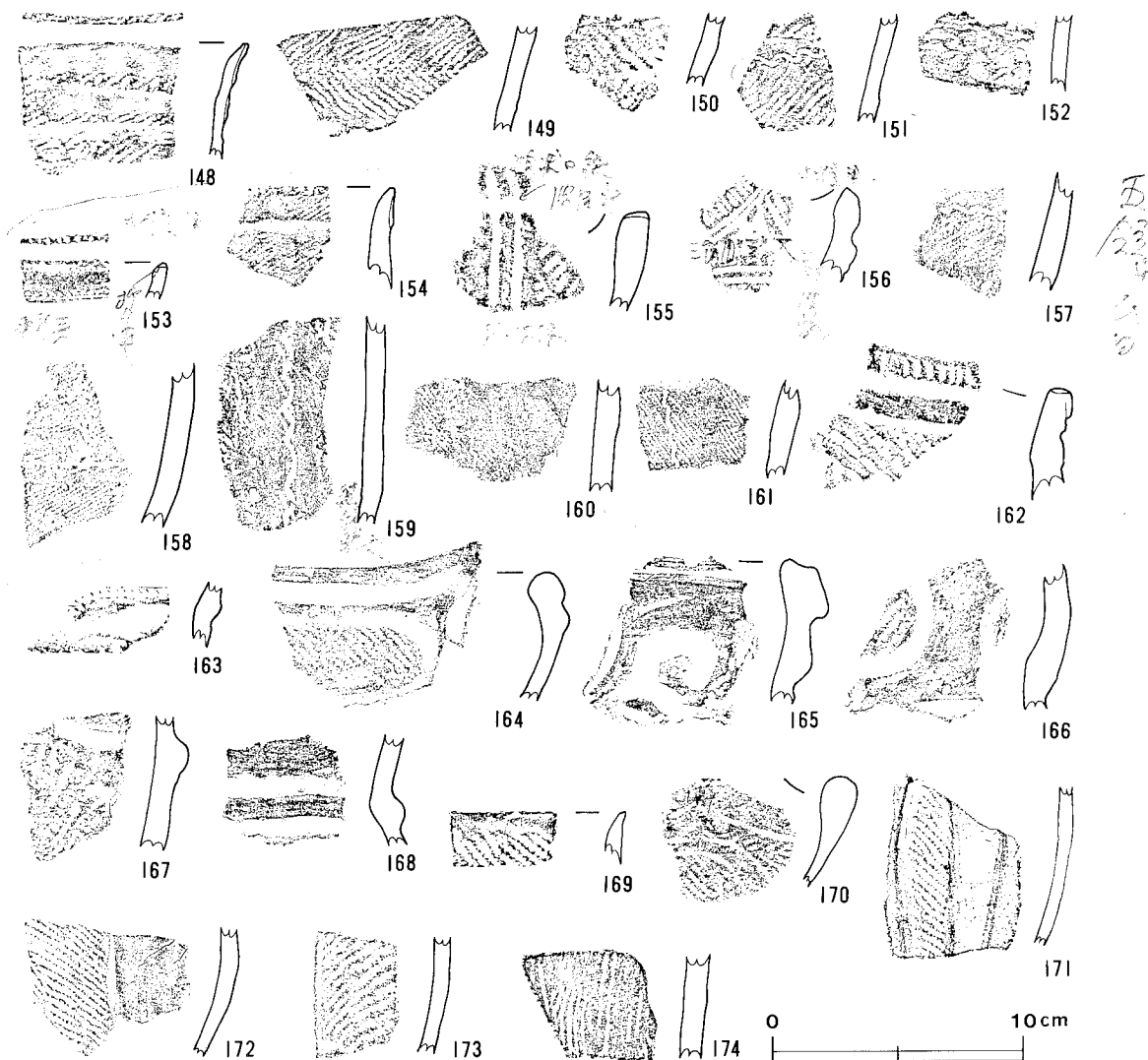
第17图 遺構外出土遺物拓影图(2)



第18图 遺構外出土遺物拓影图(3)



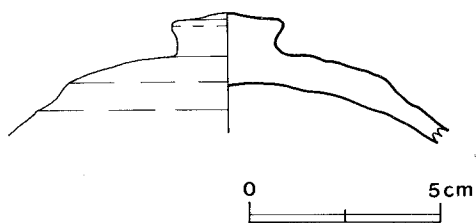
第19图 遺構外出土遺物拓影图(4)



第20図 遺構外出土遺物実測図(5)

(2) 須恵器 (第21図)

当遺跡からは、須恵器の蓋が1点出土している。平坦な頂部に中央がやや高い環状のつまみが接合され、天井部は平坦な頂部から、明瞭な稜を数条残し口縁部にゆるやかに下降している。天井部頂部は回転篋削り、天井部周辺は水挽き成形、内面はナデ調整が施されている。法量は、つまみ径3.0cm・つまみ高1.2cm・現存高3.2cmである。焼成は普通で、胎土に砂礫を含み褐灰色を呈している。



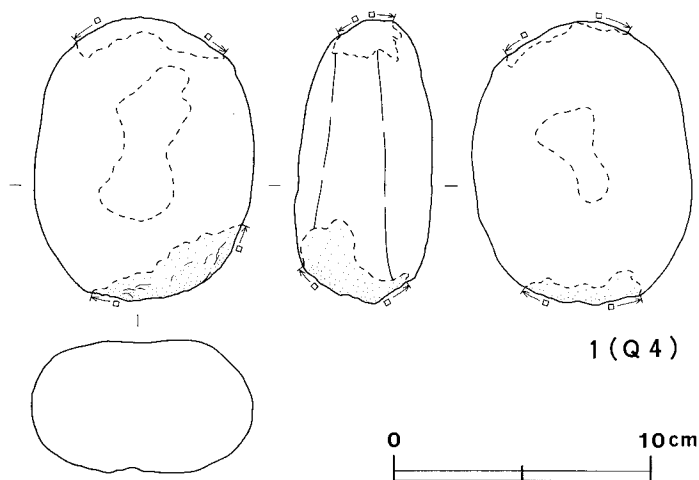
第21図 遺構外出土遺物実測図

2 石器(第22・23・24図)

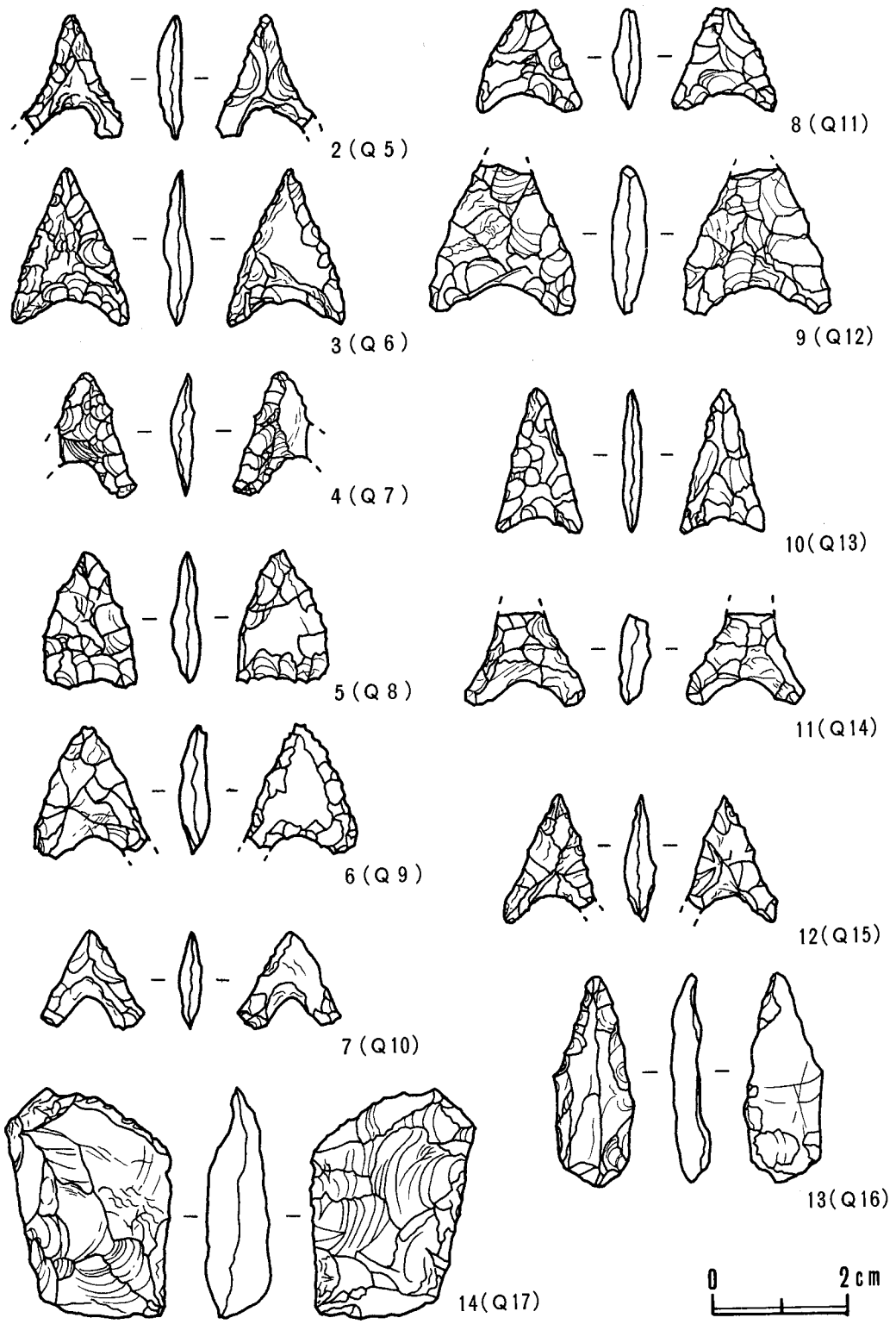
当遺跡からは、総数で15点の石器が出土している。いずれも遺構に伴わない遺物であり、内訳は、石鏃12点、石槍1点、スクレイパー1点、敲石1点である。本項では、個々の石器の出土位置、法量、石質、特徴等について一覧表に掲載した。

表3 縄文時代石器観察表

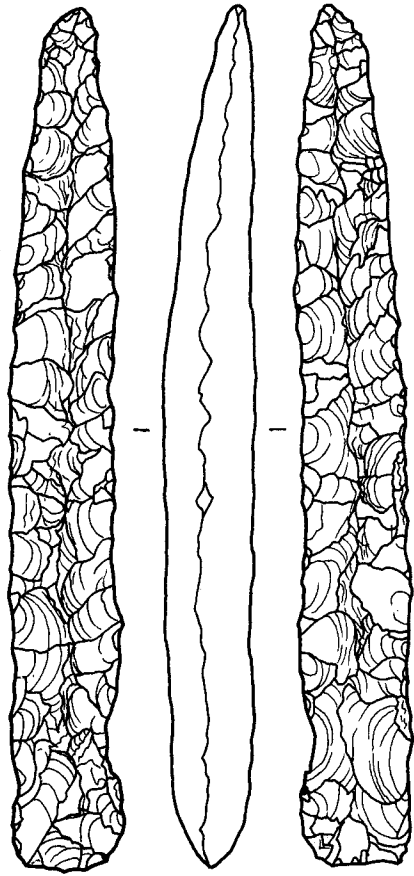
| 図版番号 | 台帳番号 | 器種 | 出土地点 | 全長(cm) | 幅(cm) | 厚み(cm) | 重さ(g) | 石質 | 備考 |
|------|------|--------|------|--------|-------|--------|-------|------|---------------------|
| 1 | Q4 | 敲石 | 表探 | 11.6 | 8.6 | 5.4 | 706.1 | 安山岩 | 下縁部に敲痕 |
| 2 | Q5 | 石鏃 | C2c8 | 1.9 | (1.5) | 0.4 | (0.5) | チャート | 無茎凹基, 片脚部先端欠損, 側辺内彎 |
| 3 | Q6 | 石鏃 | C2c8 | 2.4 | 1.8 | 0.5 | 1.1 | チャート | 無茎凹基 |
| 4 | Q7 | 石鏃 | C2c9 | 1.9 | (1.2) | 0.4 | (0.5) | チャート | 無茎凹基, 片脚部先端欠損 |
| 5 | Q8 | 石鏃 | C2d9 | 2.0 | 1.5 | 0.4 | 0.9 | チャート | 無茎凹基, 側辺外彎 |
| 6 | Q9 | 石鏃 | C2h9 | 2.0 | (1.7) | 0.5 | (1.2) | チャート | 無茎凹基, 片脚部先端欠損 |
| 7 | Q10 | 石鏃 | C2e7 | 1.5 | 1.6 | 0.4 | (0.5) | チャート | 無茎凹基 |
| 8 | Q11 | 石鏃 | C2e9 | (1.6) | 1.6 | 0.4 | (0.7) | チャート | 無茎凹基, 尖頭部先端欠損 |
| 9 | Q12 | 石鏃 | C2j0 | (2.3) | 2.2 | 0.6 | (2.1) | チャート | 無茎凹基, 尖頭部先端欠損, 側辺外彎 |
| 10 | Q13 | 石鏃 | C2j9 | 2.2 | 1.3 | 0.3 | 0.6 | チャート | 無茎凹基 |
| 11 | Q14 | 石鏃 | C2g8 | (1.4) | 1.9 | 0.5 | (0.8) | チャート | 無茎凹基, 尖頭部欠損, 側辺内彎 |
| 12 | Q15 | 石鏃 | C3f1 | 2.0 | (1.3) | 0.5 | (0.6) | チャート | 無茎凹基, 片脚部欠損 |
| 13 | Q16 | 石鏃 | C2g9 | 3.2 | 1.2 | 0.6 | 1.9 | チャート | 無茎凹基 |
| 14 | Q17 | スクレイパー | 表探 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 8.8 | チャート | 両縁側刃潰し加工 |
| 15 | Q18 | 石槍 | C2j0 | 11.3 | 1.5 | 1.2 | 21.0 | 頁岩 | 柳葉状, 表裏両面から押圧剝離調整 |



第22図 遺構外出土遺物実測図(敲石)



第23図 遺構外出土遺物実測図 (石鏃・スクレイパー)



15(Q18)



第24図 遺構外出土遺物実測図 (石槍)

第4節 まとめ

当遺跡からは土坑6基が検出されたほか、遺構外から縄文式土器片、石器が出土した。ここでは、土坑の時期と出土遺物、遺構外出土の縄文式土器を中心に述べることにする。

1 土坑の時期と出土遺物について

検出された6基の土坑の分布状況を見ると、遺跡のほぼ中央部にまとまって検出された。

当遺跡は第1章第2節の項で前述したように、数年前に重機によってハードローム層の一部まで削平がなされており、第1～4号土坑は掘り込み部をかなり削平され底面及び壁の立ち上がりの部分だけが残ったものである。第5・6号土坑も耕作に伴うトレンチャーによる攪乱が見られ遺存状態はあまり良くない。

平面形は、不整楕円形や楕円形を呈しているが、中でも不整楕円形を呈するものが3基(50%)である。

遺物を伴う土坑は、石器が出土した第1・3号土坑及び縄文式土器片が出土した第6号土坑の3基で、他の土坑からの出土はなかった。第1号土坑の底面上から同レベルで、時期差のみられる尖頭器と石匙が横位の状態で出土した点は注目すべきである。土層は締まりのある自然堆積を示しており、尖頭器が流れ込みによるものとは考えにくく、石匙と尖頭器は同時に置かれたような状態で出土した。石匙は縄文時代早期前葉から出現しているが、一般的な存在になるのは同期末葉からである。県内における石匙の出土の報告例は少なく、当財団が調査した中では小場遺跡・新池台遺跡・境松遺跡・今城遺跡・外山遺跡・筒戸A遺跡・大谷津A遺跡において報告されているにすぎない。第1・3号土坑出土の石匙から明確に時期を決定することはできないが、出土した土器の量から判断すると縄文時代前期中葉（浮島Ⅰ～Ⅲ式期）前後に属するものと推定され、土坑もほぼ同時期に構築されたものと思われる。第1号土坑出土の尖頭器は県内及び近県においても類例を見ない超大型の完形品であり、整った柳葉形を呈し、表裏両面からの入念な押圧剥離による調整、さらに両面縁に細調整が施された長身で優美な形状は槍先というより短剣としての機能を有するのかも知れない。この尖頭器は県内の著名な先土器時代の遺跡である後野遺跡・梶巾遺跡に代表される大形石刃石器文化に属する頃の石器と推定される。後野遺跡出土の石器群が神子柴遺跡・長者久保遺跡出土のものと同じグループのものであると位置づけられている点から、当遺跡出土の尖頭器は、先土器時代終末期の所産ではないかと推定される。時期差のみられる尖頭器・石匙の同遺構からの出土については不明の点が多く、今後の調査例の増加を待って検討をしていくべき問題と思われる。

第6号土坑からは、覆土下層及び底面上から縄文時代前期前葉の黒浜式、同期中葉の浮島式の

土器片が総数で61点出土されている。いずれも破片であるが、下層及び底面上からの出土である。土層の状況については、第4章第1節の項で述べたように締まりのある自然堆積の様相を示している。本跡出土の縄文式土器のほとんどが浮島式期のものである点から判断すると、本跡は縄文時代前期中葉のものと考えられる。

前述のように、当遺跡内の土坑は、遺物を伴う第1・3・6号土坑と、遺物を伴わない第2・4・5号土坑に大別される。遺構に伴う遺物の出土が少なく、遺構の時期を明確に判断することは困難であるが、

- 土坑近辺からの出土遺物の大部分が、縄文時代前期中葉の浮島式期の土器片であり、特に第6号土坑の覆土下層及び底面上から縄文時代前期の黒浜・浮島式の土器片が出土していること。
 - 確認面からの深さがほぼ同じでハードローム層まで掘り込まれており、底面の状態がほぼ同じように平坦であること。
 - 各土坑が近距離にまとまって位置しており、覆土が自然堆積の状況を示し、下層にローム粒子・ハードロームブロックを含む褐色土が堆積していること。
 - 第1号土坑出土の石匙は、遺構に伴うものと判断しており、前期の遺物と推定されること。
- 以上のことから総合的に判断し、第1～6号土坑は縄文時代前期に構築されたものと推定される。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育財団文化財調査報告第35集「小場遺跡」茨城県教育財団 1986年
- (2) 茨城県教育財団文化財調査報告第17集「新池台遺跡」茨城県教育財団 1983年
- (3) 茨城県教育財団文化財調査報告第41集「境松遺跡」茨城県教育財団 1987年
- (4) 茨城県教育財団文化財調査報告VIII「今城遺跡」茨城県教育財団 1981年
- (5) 茨城県教育財団文化財調査報告XIII「外山遺跡」茨城県教育財団 1982年
- (6) 茨城県教育財団文化財調査報告第24集「筒戸A遺跡」茨城県教育財団 1984年
- (7) 茨城県教育財団文化財調査報告第28集「大谷津A遺跡」茨城県教育財団 1985年
- (8) 茨城県史料 考古資料編 先土器縄文時代 茨城県 1979年
- (9) 「後野遺跡」-関東ローム層中における石器と土器の文化-勝田市教育委員会 1976年
- (10) 勝田市史 原始・古代編 勝田市史編さん委員会 1981年

表4 近県における尖頭器出土例—先土器時代終末期から縄文時代草創期

| 遺跡名 | 全長(cm) | 最大幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(cm) | 石質 | 最大幅の位置 | 時期及び出土地点 | 備考 |
|-------------------------|--------|---------|--------|---------|------|-------------|------------------------------|----------------------|
| 小角田前遺跡 (群馬) | (7.2) | 1.8 | 0.7 | (10.8) | 黒色頁岩 | 中央よりやや基部側寄り | 縄文時代草創期 表採 | 細身の柳葉形, 基部欠損, 表裏両面調整 |
| 森山遺跡 (群馬) | (17.3) | 4.1 | 1.4 | — | 珪質頁岩 | 基部側寄り | 先土器時代終末期 | 柳葉形, 先端部欠損, 表裏両面調整 |
| 羽白D遺跡 (福島) | (7.1) | 1.3 | 0.5 | (4.7) | 珪質頁岩 | 基部側寄り | 先土器時代終末～草創期 第18号住居跡(前期初頭) | 柳葉形, 表裏両面調整, 側縁部鋸歯状 |
| 釈迦堂山e遺跡 (栃木) | (9.1) | 2.5 | 0.7 | (21.7) | 流紋岩 | 基部側寄り | —— | 木葉形, 先端部若干欠損, 表裏両面調整 |
| 安光寺遺跡 (埼玉) | 5.0 | 1.8 | 0.6 | 5.0 | 硬質頁岩 | 中央 | 先土器～縄文 不明 | 木葉形, 表裏両面調整, 側縁部鋸歯状 |
| 新林大富遺跡 (千葉) | 8.3 | 2.4 | 0.6 | 13.35 | 頁岩 | 中央 | 先土器時代 C12区覆乱中 | 木葉形, 表裏両面調整, 両縁側細部調整 |
| 多摩ニュータウン No406遺跡(東京) | 11.45 | 1.95 | 0.85 | 19.90 | 頁岩 | 中央 | 第III層下部 | 柳葉形, 表裏両面調整 |
| 多摩ニュータウン No406遺跡(東京) | (8.95) | 2.25 | 1.15 | (20.36) | チャート | 中央よりやや基部側寄り | 第III層下部 | 木葉形, 基部若干欠損, 表裏両面調整 |
| 多摩ニュータウン No406遺跡(東京) | 9.40 | 2.05 | 1.00 | 17.33 | チャート | 基部側寄り | 第III層下部 | 木葉形, 表裏両面調整 |

参考文献

- 『小角田前遺跡』 群馬県教育委員会 1985年
- 『森山遺跡』 群馬県北橘村教育委員会 1986年
- 『福島県文化財調査報告書第183集』 岩下向A遺跡・羽白D遺跡・羽白E遺跡 福島県教育委員会 1987年
- 『栃木県立博物館人文部門収蔵資料目録第1集(考古1)』 那須の遺跡 栃木県立博物館 1987年
- 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集』 清水谷遺跡・安光寺遺跡・北坂遺跡 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981年
- 『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書II』 大栄地区(1) 財団法人 千葉県文化財センター 1986年
- 『東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集』 多摩ニュータウン遺跡 財団法人 東京都文化財センター 1986年
- 『日本の美術1 No.188 旧石器時代』 至文堂 1982年
- 『茨城県史料』 考古資料編 先土器・縄文時代 1979年
- 『勝田市史』 原始・古代編 1981年
- 加藤晋平・鶴丸俊明著『石器の基礎知識I』 柏書房 1980年
- 鈴木道之助著『石器の基礎知識III』 柏書房 1981年

2 縄文式土器について

当遺跡から出土した縄文式土器は、早期の沈線文系、前期の黒浜式・諸磯式・浮島式・興津式、中期の五領ケ台式・阿玉台式・加曾利E式、東北系の大木式に比定される土器である。出土した土器片を時期及び型式でみると、縄文時代中期の黒浜式・浮島式・諸磯式に比定されるものが全体の80%以上を占める。出土状況は、削平及び耕作等により原位置を留めているものは少なく、小破片で、しかも復元できたものもないため器種は不明であるが、深鉢形を呈する土器と思われる。

浮島式土器

浮島式土器は、当遺跡から出土した縄文式土器の50%程を占める土器群であり、通常Ⅰ～Ⅲ式に大別される。ここでは、当遺跡内出土の浮島式土器の概観及びⅠ～Ⅲ式に分類した文様構成について述べてみたい。浮島式土器を概観すると、胎土に砂粒・砂礫などを含み、繊維を含まない。器厚は7～12mm程で、明赤褐色・にぶい褐色・にぶい橙色などの色調を呈している。平縁のものが多いが、波状口縁のものも含まれている。粗製土器もみられ、口縁近くに輪積み痕を残し、その下端に棒状工具による凹凸文が連続的に施されているものもある。

浮島Ⅰ式に比定される土器の文様構成について類別化してみると、次のとおりである。

第Ⅰ類 半截竹管による平行沈線文を有するもの

撚糸文を地文としその上に平行沈線が施されるものと、無文地に施されるものがある。平行沈線文は横位・斜位・波状・木葉状・格子状に施文されている。円形竹管文と組み合わせた例もみられる。

第Ⅱ類 連続爪形文を有するもの

平行沈線文と組み合わせて文様構成するものが多く、横位・斜位・曲線的に施されている。撚糸文を地文としたものが多く、口唇直下に口縁部に沿って施文されている。

第Ⅲ類 貝殻文を有するもの

アナガラ科に属する貝殻の腹縁を縦位・斜位に押圧したもの、波状に施したものがみられ、繊細で拙劣な感じを受ける。主に胴部に施されているが、口縁部に施文されているものも若干存在する。

第Ⅳ類 変形爪形文を有するもの

半截竹管具の支点を交互に変えながら使用した狭幅の変形爪形文を連続的に施文している。口縁部上位に施されている場合が多くみられる。

浮島Ⅱ式に比定される土器の文様構成について類別化すると、次のとおりである。

第Ⅰ類 半截竹管による平行沈線文を有するもの

沈線間は密になり、多条に施文されている。平行沈線文を横位・斜位・波状に施文している。

第Ⅱ類 連続爪形文を有するもの

平行沈線文との組み合わせによる文様構成が多いが、Ⅰ式より爪形文が密に施されている。口縁直下に1条施したり、多条にわたって施文される場合もある。

第Ⅲ類 貝殻文を有するもの

アナダラ科に属する放射筋を有するもの、放射筋のない貝殻の腹縁を使用した波状貝殻文が施文されている。

第Ⅳ類 変形爪形文を有するもの

変形爪形文はⅠ式より幅広となる。横位・斜位に数段にわたって施文されることが多くみられる。

その他に、輪積み痕を残し、その下端に棒状工具による押圧を加えている粗製土器の出土もみられるが、撚糸文はⅠ式に比べ極端に少なくなる。

浮島Ⅲ式に比定される土器の出土は、量的に極端に減少する。この型式を代表する三角刺突文が施文されているものは出土していない。貝殻腹縁を使用した波状貝殻文はⅡ式に比べて不明瞭になってきているが、口縁付近にも達している。口縁直下に短い条線文を縦位に施したり、やや斜位に押圧されたキザミ目を有する口縁部が多くみられる。平行沈線文・連続爪形文・変形爪形文を有する土器の出土はなく、記述することはできないが、これらが当遺跡内出土の浮島Ⅰ～Ⅲ式における文様構成である。

当遺跡は、先土器時代終末期から縄文時代中期後葉加曾利EⅢ期までの断続的な生活の舞台であり、特に、最盛期は同前期中葉の浮島式期であったと考えられる。巴川の支流が形成する低湿地に舌状に張り出した台地先端部を中心に生活を営んでいたと思われるが、これを立証する住居跡は数年前の工事の際に、重機により削られ消滅してしまったのかも知れない。

第5章 割り塚古墳

第1節 遺跡の概要

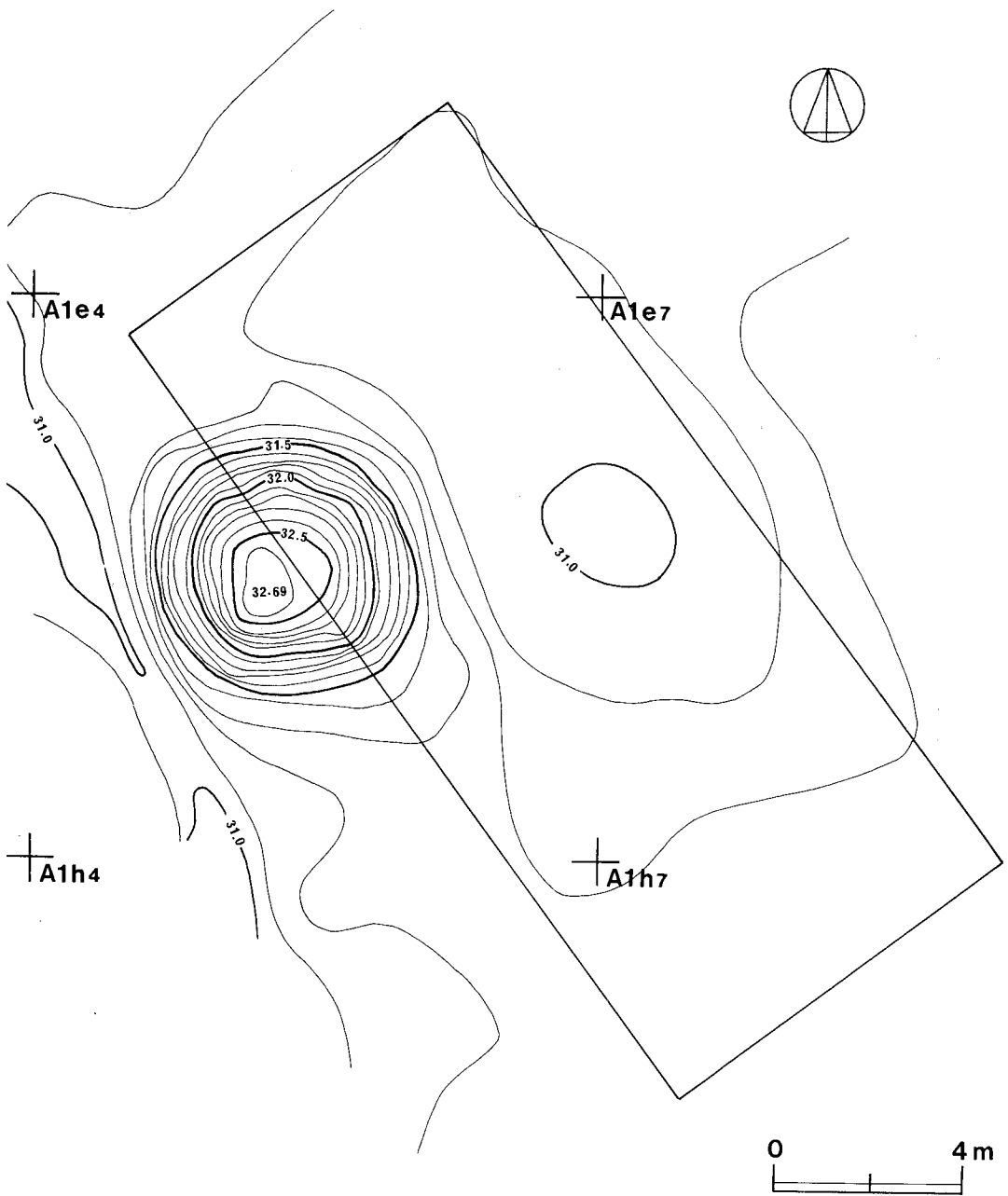
割り塚古墳は、鉾田町の市街地中央部から北西約6.3kmに位置し、標高31m前後の平坦な台地上に所在する。

調査の結果、古墳に伴う主体部や周溝は検出されず、また、塚の性格及び築造に関わるような遺物の出土もなかった。円墳10基からなる割塚古墳群の一部と考えられていたが、調査の結果、古墳ではなく塚であることが判明した。

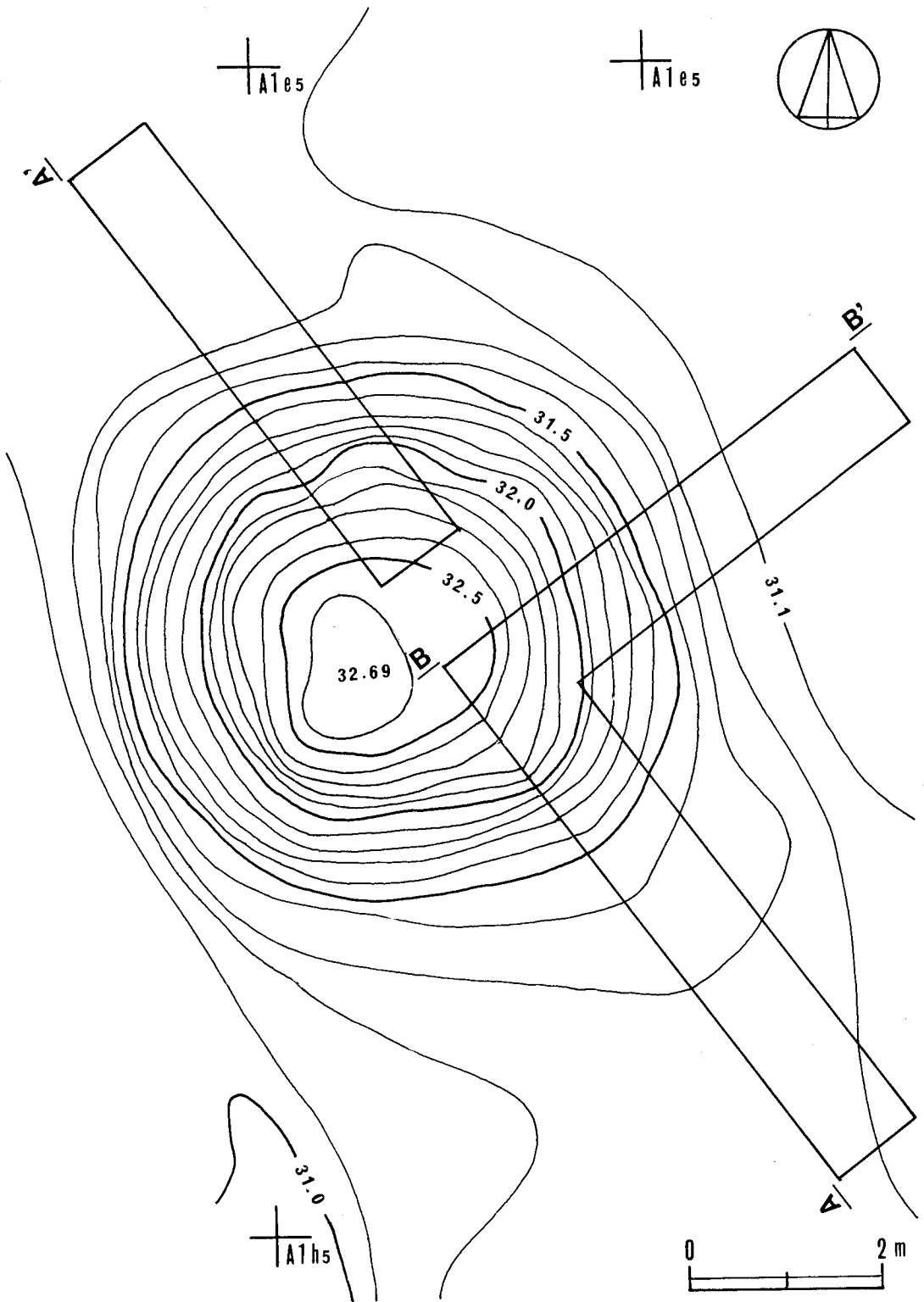
第2節 塚

本跡は、当遺跡の西側端部に所在する。塚の平面形状は円形を呈し、長径8.2m・短径6.5m、塚高1.2mの規模を有する。長径方向はN-36°-Wである。調査範囲は本跡の北西から南東方向にかけて建設される道路部分であり、塚全体の2分の1ほどである。塚頂部は調査区域外にあり、標高32.69mである。裾部は全体的に緩やかに傾斜し、南東方向でやや張り出している。塚は15層からなり、塚上部にみられる攪乱は、現況が山林であった点から判断すると木の根によるものであると考えられる。第1層は表土層で塚全体を覆い、ローム粒子を極少量含む暗褐色土である。第2層はローム粒子を極少量含む締まりのある暗褐色土で、ほぼ水平に盛土されている。第3層は黒色土ブロック・ロームブロックを含むやや締まりのある暗褐色土で、第2層と同様の状態で厚く盛土されている。第4～6層は含有物の量による違いがみられるが、いずれもローム粒子・黒色土ブロックを含むやや締まりのある黒褐色土層で、水平及びブロック状に盛土されている。第7層はローム粒子・黒色土ブロックを含むやや締まりのある極暗褐色土で、第6層上に水平に盛土されている。第8層はローム粒子中量・黒色土ブロック及びハードロームブロックを極少量含むやや締まりのある極暗褐色土で、東西両方向から内側にかけて盛土されたような状態を示している。第9～12層は塚を構築する際に盛土されたものではなく、流出したものと考えられる。第14・15層はローム粒子を含む黒褐色土で、堆積状況から自然堆積と考えられ、第14層は本跡の築造前における表土であったと推定される。第14層の土層観察からは、古墳の築造の際にみられるような整地の痕跡は確認されず、凹凸を呈する旧表土上に盛土し、第4層まで積んだ段階で一層水平状態とし、塚の高度を増すために第3層以上の上位の層を積み重ねたものと考えられる。

本跡は当初、古墳として発掘調査を進めてきたが、古墳に伴う周溝や埋葬施設である主体部及び埴輪等の遺物が検出されなかったため、検討の結果、塚であると判断した。本跡からの遺物出

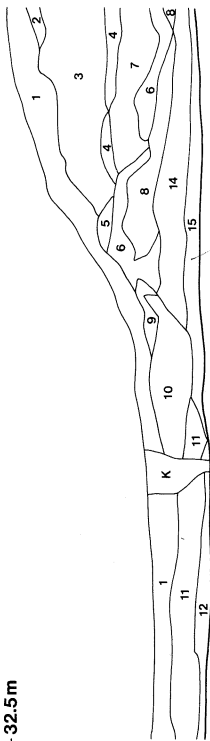


第25図 割り塚古墳遺構配置図

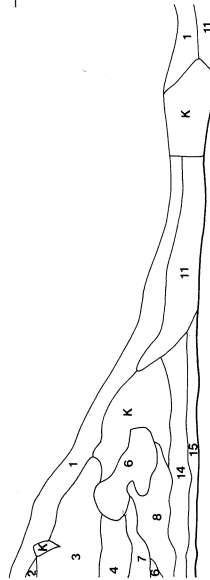


第26図 割り塚古墳 平面図

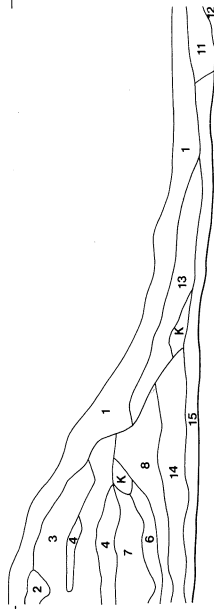
A — 32.5m



A'



B



B'

第27図 割り塚古墳土層断面図



割り塚古墳土層解説

1. Hue 7.5YR3/3 ローム粒子極少量を含む暗褐色土 木根の攪乱が激しい
 2. Hue 7.5YR3/3 ローム粒子極少量を含む暗褐色土
 3. Hue 7.5YR3/4 ロームブロック中量, 黒色土ブロック少量を含む暗褐色土
 4. Hue 7.5YR2/2 ロームブロック少量, 黒色土ブロック中量を含む黒褐色土
 5. Hue 7.5YR2/2 ローム粒子極少量を含む黒褐色土
 6. Hue 7.5YR2/2 ローム粒子・黒色土ブロック少量を含む黒褐色土
 7. Hue 7.5YR3/4 ローム粒子多量, 黒色土ブロック少量を含む暗褐色土
 8. Hue 7.5YR2/3 ローム粒子中量, 黒色土ブロック・ハードロームブロック極少量含む極暗褐色土
 9. Hue 7.5YR2/2 ローム粒子・焼土粒子少量を含む黒褐色土
 10. Hue 7.5YR3/4 ローム粒子少量, 黒色土ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量含む黒褐色土
 11. Hue 7.5YR3/3 ローム粒子少量を含む粘性のある暗褐色土
 12. Hue 7.5YR4/3 ローム粒子多量を含む粘性のある褐色土
 13. Hue 7.5YR3/4 ローム粒子少量, ハードロームブロック・焼土粒子極少量を含む暗褐色土
 14. Hue 7.5YR3/4 ローム粒子少量, ハードローム極少量を含む黒褐色土
 15. Hue 7.5YR3/4 ローム粒子少量を含む黒褐色土
- K. 攪乱

土は皆無であり、時期や性格を明確にすることはできないが、盛土の状態を全体的に判断すると、近世、またはそれ以降に築造されたものと推定される。

第3節 まとめ

鉾田町の中央部を南流する鉾田川、西部を南東流する巴川に面する台地上には数多くの古墳や塚の所在が確認されている。当遺跡の周辺においては、鳥栖古墳、松崎古墳、円満寺古墳群、茂平前古墳群、童子塚古墳群、割塚古墳群等が所在するが、いずれも発掘調査が実施されたものはない。遺跡の東端部を走る町道の東側に所在する割塚古墳群は、直径 3m 前後の円墳 6 基、5m 前後の円墳 2 基、15m 前後の円墳 1 基の 9 基が町道に沿って 1 列に並んで所在し、さらに町道の西側に円墳 1 基の存在が確認されている。従って、本跡は円墳 10 基からなる割塚古墳群の一部をなすものと考えられるが、調査範囲が塚 1 基の 2 分の 1 程であるために、全体を解明するには至らなかった。しかし、土層観察の結果から自然堆積ではなく、明らかに人為的に盛土されていることが確認され、また、周溝・主体部等が検出されなかったことから、本跡は古墳ではなく塚であると判断した。

当教育財団が発掘調査を実施した塚は、昭和52年度調査の松葉遺跡内の塚 4 基、昭和54年度調査の仲根台塚群 1・2号塚、打越C遺跡の塚 1 基、前清水遺跡内の塚 1 基、稲荷塚 1 号塚、昭和56年度調査の仲根台塚群 3・4号塚、町田塚群（般若塚） 1 基、薄倉古墳 1 基、稲荷峯古墳 1 基、昭和59年度調査の十三塚遺跡内 7 号塚、昭和60年度調査の大久保 B 遺跡内愛宕塚の 16 基と昭和62年度調査の割り塚古墳（当遺跡）である。これらの発掘調査を実施した塚からの出土遺物は、松葉遺跡・稲荷峯古墳・仲根台塚群 3・4号塚から土師質土器（灯明皿）や古銭等が極少量出土しただけであり、塚の築造時期及び性格については未だ解明されていない。本跡の調査前の状態からも、塚頂部が平坦であるとか供養塔などが建ててあったという痕跡は観察されず、信仰上の対象物ではないと考えられる。さらに、調査の結果、古墳のように埋葬施設としての機能を有するものではないことが判明した。鈴木道之助氏は、千葉県東寺山戸張遺跡の報告の中で塚についてまとめ、塚は台地先端部には存在せず道路沿いに位置しており、寺院との関係を示唆している。本跡においても、台地の平坦部で道路沿いに位置しており、この道路と茨城・鹿島線の交差点が町の中心部に向かっていくと無量寿寺に至る。従って、この道路も古くからあった可能性があり、塚と道路、さらには寺との関係も考えられる。また、本跡については「力試し」の話が地域の人々に伝えられている点から、「力塚」的なものも考慮しなければならないと思われる。いずれにしても、塚の調査例、資料の増加によりその性格がより明確になっていくものと思われる。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育財団文化財調査報告1「松葉遺跡」茨城県教育財団 1979年
- (2)～(4) 茨城県教育財団文化財調査報告VII 茨城県教育財団 1981年
- (5)～(9) 年報1 茨城県教育財団 1981年
- (10) 茨城県教育財団文化財調査報告第39集「尾坪台・十三塚遺跡」茨城県教育財団 1986年
- (11) 茨城県教育財団文化財調査報告第37集「大久保A・B遺跡」茨城県教育財団 1986年
- (12) 京葉II 千葉県東寺山戸張作遺跡 千葉県文化財センター 1977年
- (13) 茨城県大百科事典 銚田町鳥栖にある浄土真宗本願寺派の寺 茨城新聞社 1981年

終章 むすび

茨城県鹿島郡鉾田町上富田・下富田地区を通る主要地方道茨城・鹿島線の改良工事に先立ち、予定地内に所在する梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳の発掘調査を実施した。

梨ノ子木久保遺跡からは、縄文時代の遺構として土坑6基が検出された。住居跡は検出されなかったが、これは数年前の工事によって削平され消滅したものと思われる。遺物は、先土器時代終末期の所産と考えられる尖頭器の他に、縄文時代早期から中期に比定される土器片が出土した。特に多いのは縄文時代前期中葉の浮島Ⅰ・Ⅱ式期の土器片で、土坑もこの時期のものと思われる。

発掘調査によって、先土器時代終末期から縄文時代中期に至るまで、当時の人々がこの地で断続的に生活を営んできたことが判明した。遺跡は巴川の支流が形成する低湿地に舌状に張り出す台地縁辺部に位置しており、当時の人々が生活していく上で、極めて良好な環境であったと思われる。

割り塚古墳は円墳10基から構成される割塚古墳群の1基であると考えられていたが、今回の調査では、主体部である埋葬施設や周溝等の古墳に伴うものは検出されず、塚であることが判明した。当遺跡からの遺物出土は皆無であり、塚の築造年代・性格を解明することはできなかったが、塚の調査例の増加を待つて十分に比較検討をすることで解決を図っていきたい。

いずれにしても、梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳の調査成果が、鉾田町の歴史を解明する上でささやかながらお役に立てば幸いである。

最後に、本報告書を作成する上で、関係各位から御指導・御協力をいただいたことに対し、心から感謝の意を表したい。

写 真 图 版



梨ノ子木久保遺跡調査前全景



トレンチ発掘全景



遺跡全景



第1号土坑遺物出土状況



第2号土坑



第3号土坑

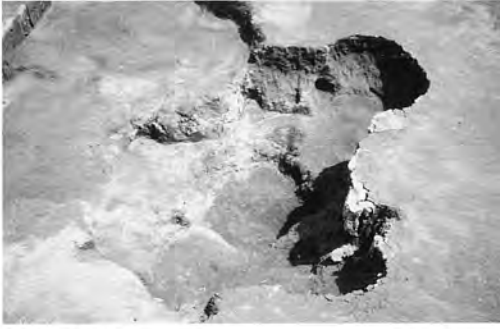


第4号土坑



第5号土坑

PL 2



第6号土坑



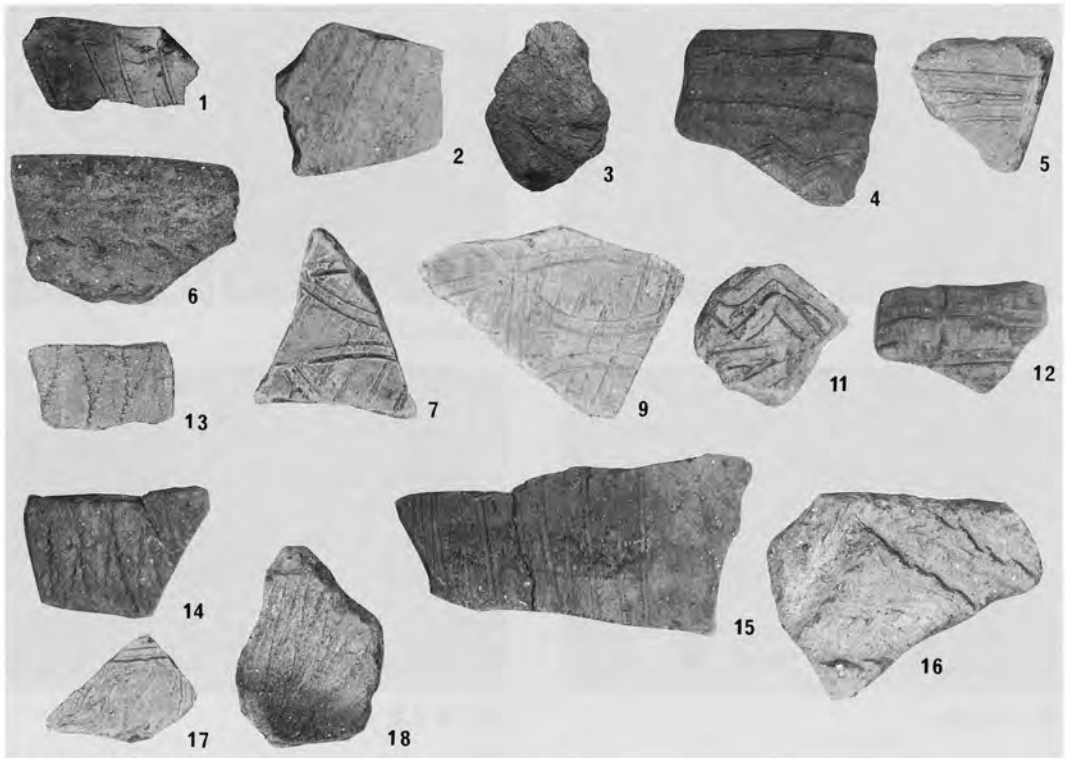
割り塚古墳調査前全景



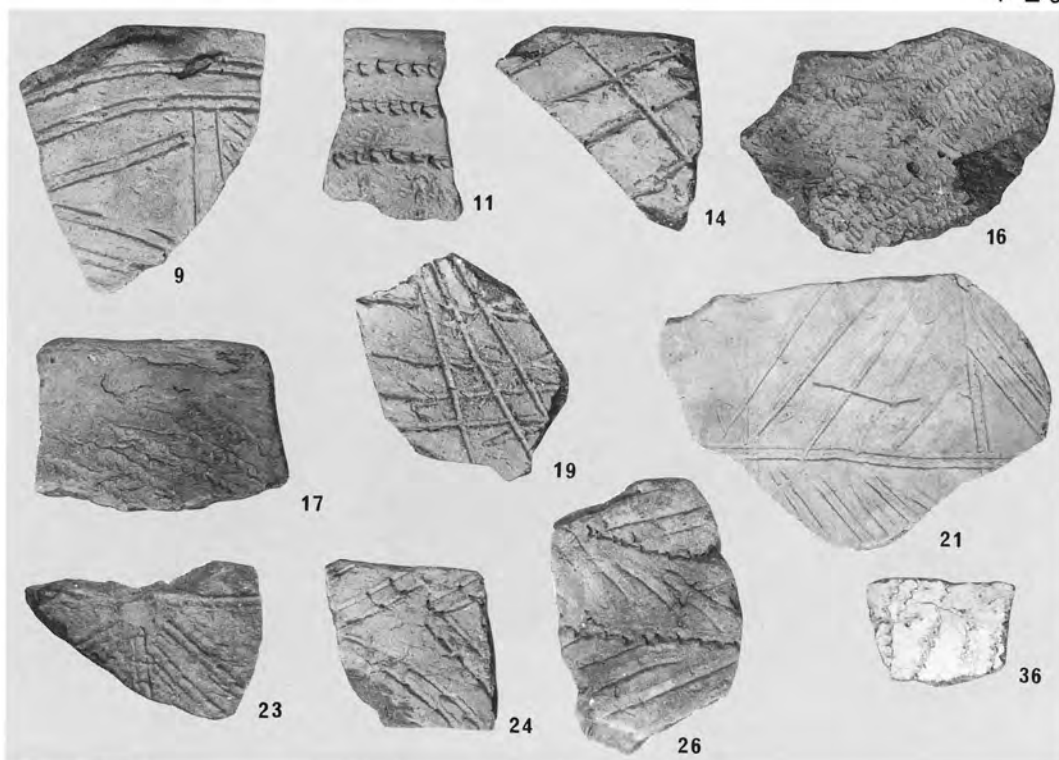
トレンチ発掘全景



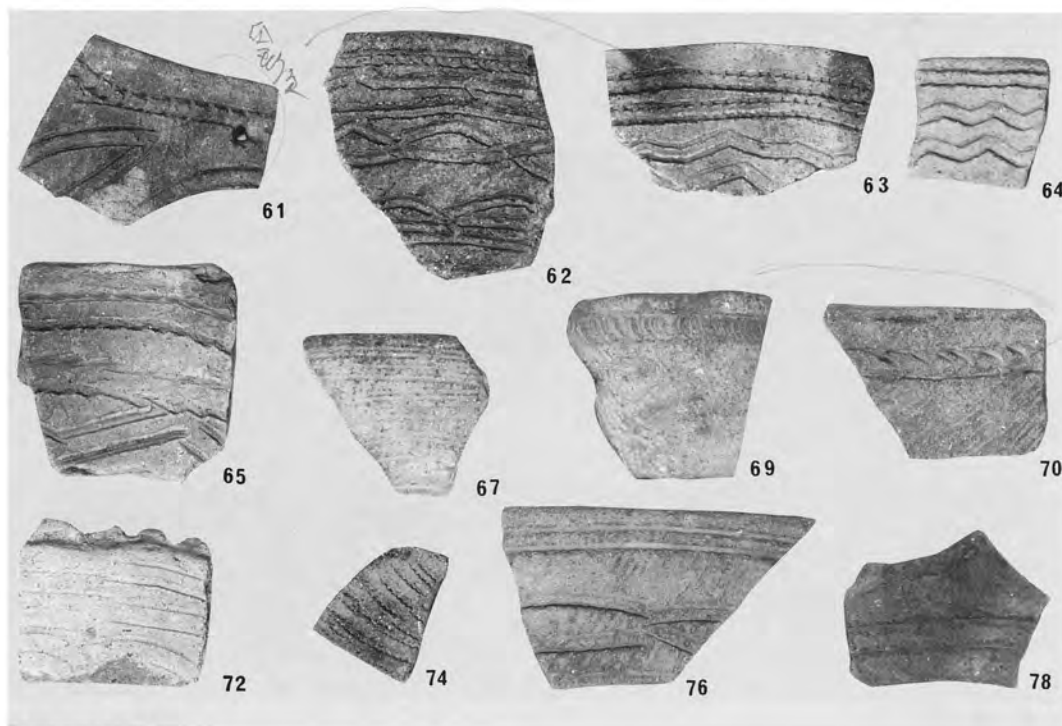
土層断面



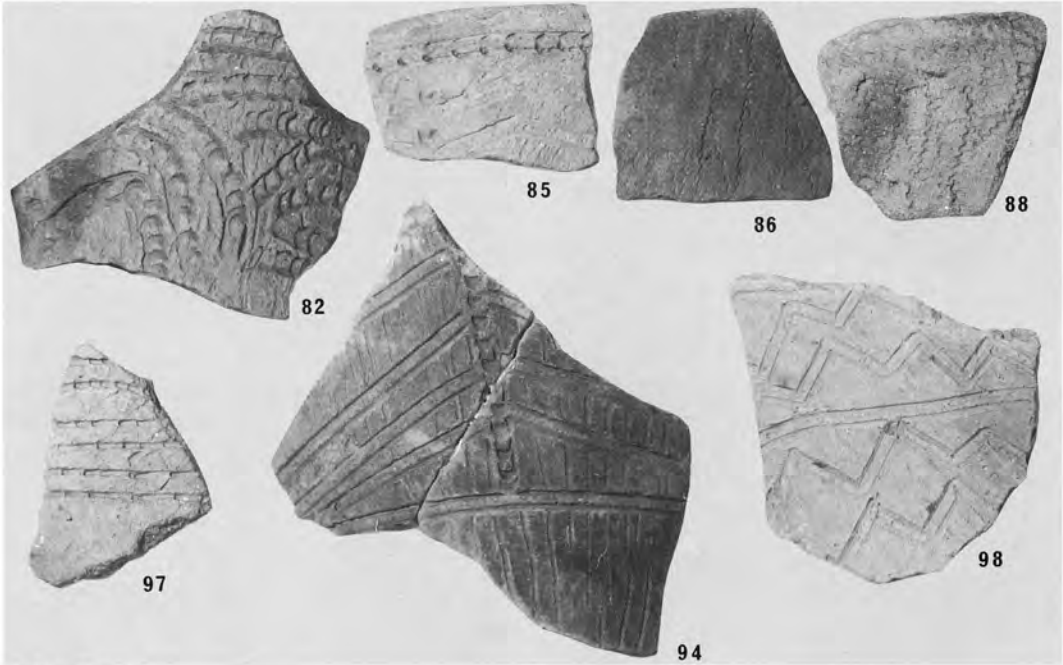
第6号土坑出土土器



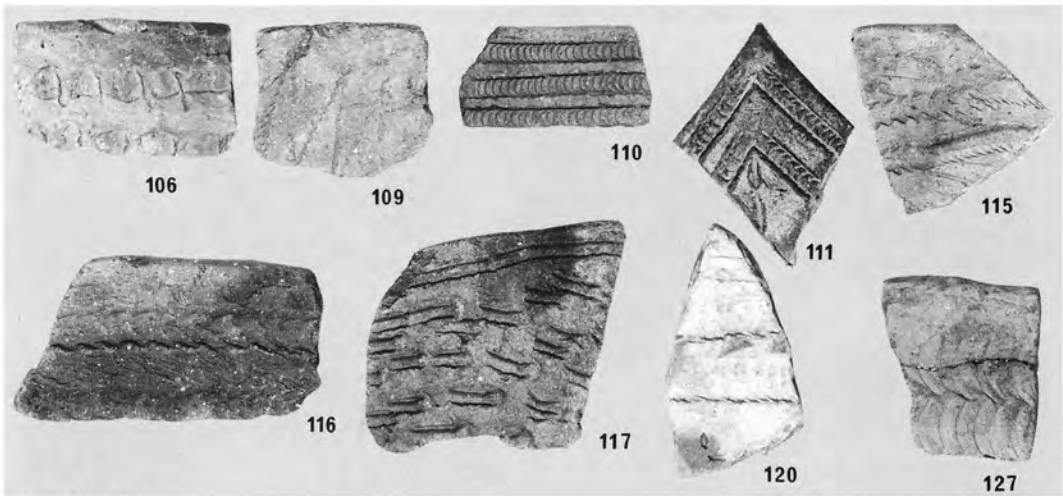
II群 a 類土器



III群 c 類土器



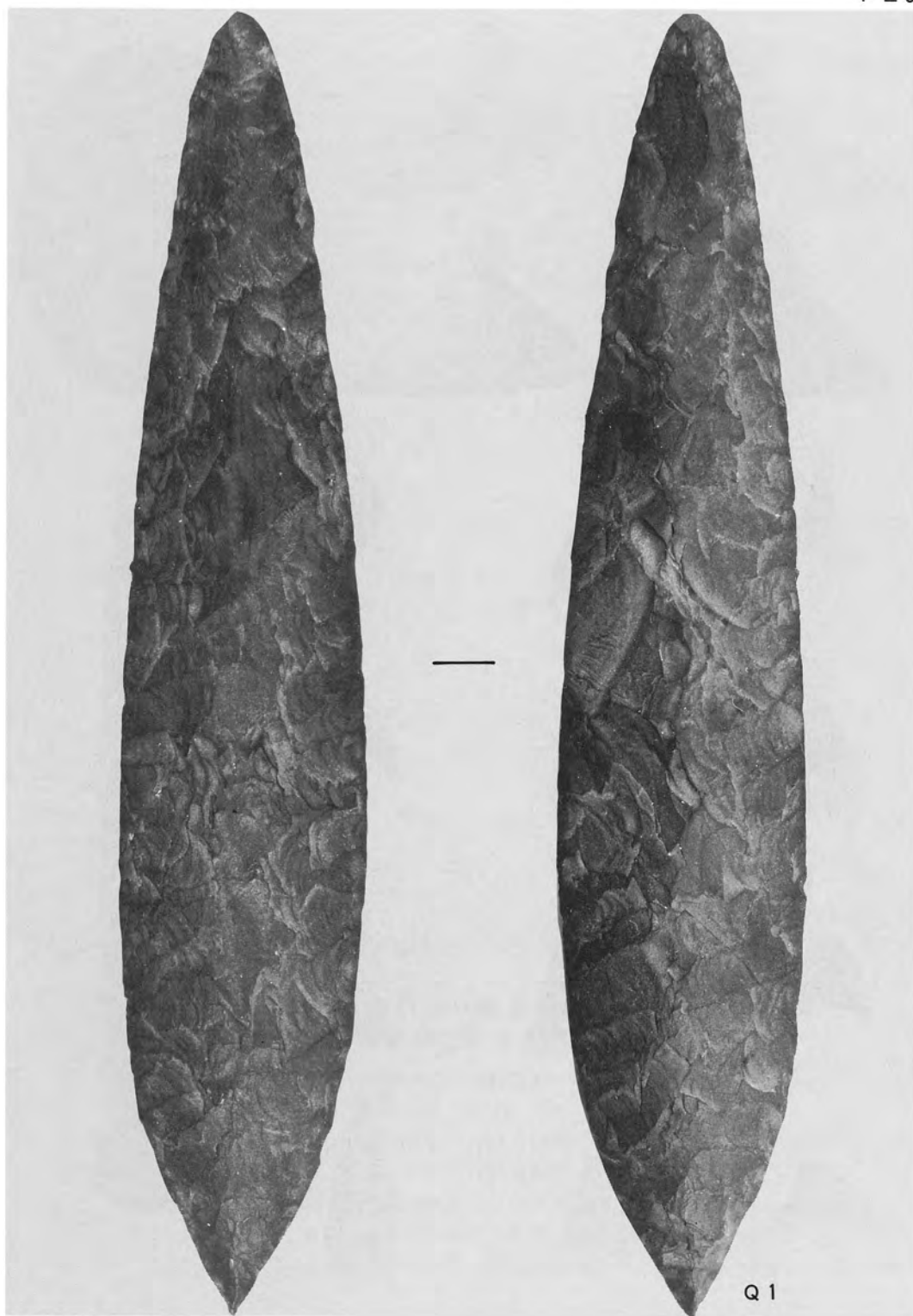
III群c類土器



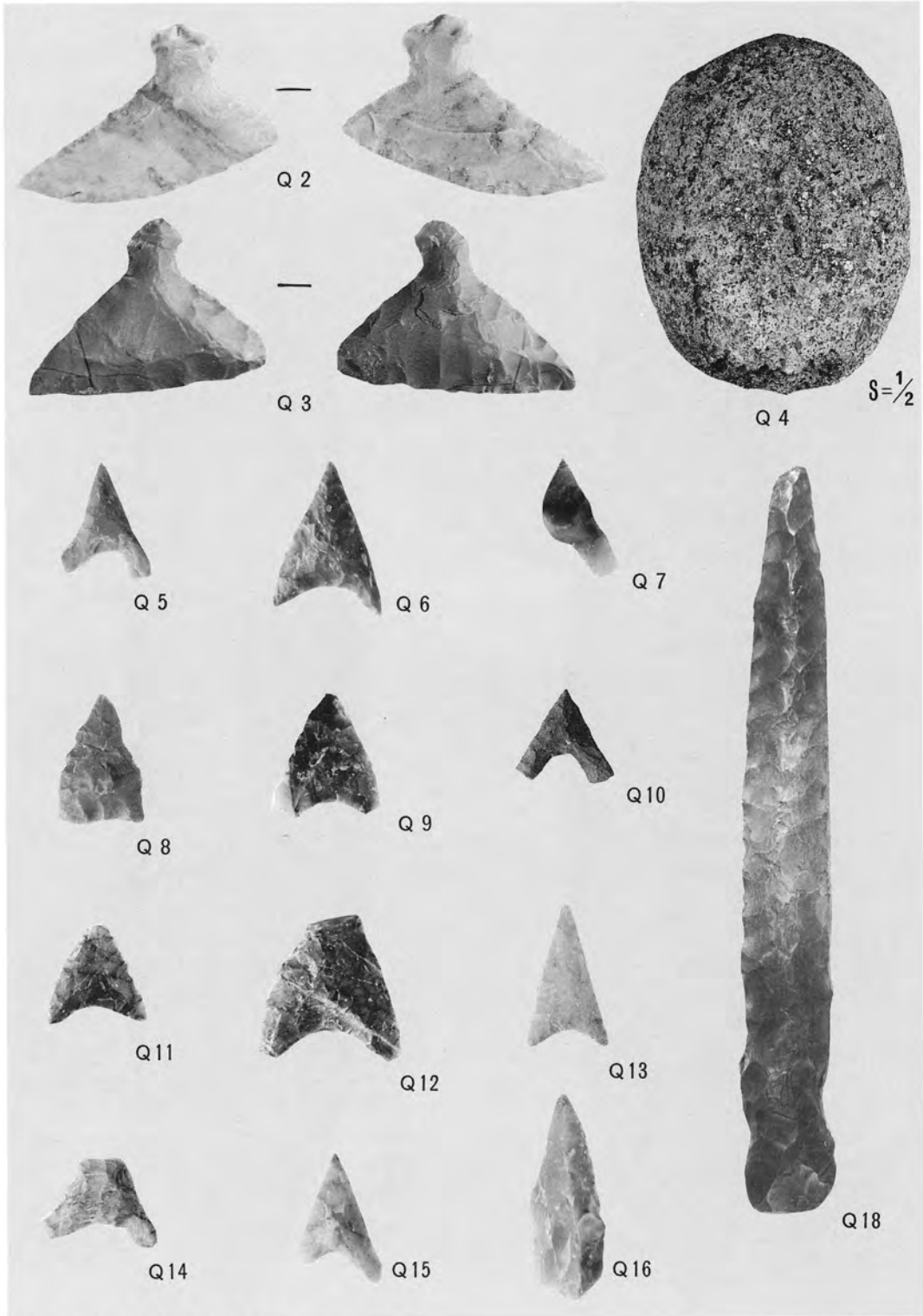
III群d類土器



III群e類土器



石器(1)-尖頭器



石器(2)一石匙・敲石・石鏃・石槍

茨城県教育財団文化財調査報告第47集

**主要地方道茨城・鹿島線道路改良
工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書**

梨ノ子木久保遺跡
割り塚古墳

昭和63年6月24日印刷

昭和63年6月30日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号

印刷 株式会社 きど印刷所
水戸市見川町2558-21

